
沈黙のサーバント

瀬田一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

沈黙のサーバント

【Nコード】

N3374W

【作者名】

瀬田一郎

【あらすじ】

人類の30%が吸血鬼となった世界。人類は家畜として飼いな
らされ、吸血鬼の中でも身分の差が生じている。主人公の佐久間は
世界を牛耳る二つの製薬会社のうち、一つの会社に属するハンター
だった。吸血鬼の細胞に適合出来なかった人間を処理する専門のハ
ンターはひどく虚ろな毎日だった。だが、家族を守るために吸血鬼
であり続けることが出来る方法はたったこれだけしかなかった。

プロローグ

「雨…か」

吸血鬼である佐久間は煙草に火をつけながらアーリー&マーリーを見上げながらそうもらした。

アーリーとマーリーはドーム状の幕の表面を管理している人工操作出来る機械だ。

光に含まれる紫外線を遮断してくれる薄い膜が破れてしまえばたちまちナイトタウンに住む吸血鬼は炎上し、蒸発してしまう。

それならば全てを覆うドームにすればいいと思う人間がいる。

だが、考えて欲しい。光のない世界はひどく凄惨なものだろうか？味のしないハンバーガーを頬張るのと同じさ。

「また…ここにきたのか？」

おひとけ 帯解は佐久間の深紅の瞳を左側からジッと見つめていったが、佐久間は振り返らずに好きなんだよと答えた。

アーリーの球体の額の部分についてあるランプがチカチカと点灯し、マーリーと通信する。

求愛しているように見えると言われているのは互いの形が全く異なるからだろう。

アーリーは完全に丸い球体。マーリーは棘がついてあり、流線形のアーモンドのような形をしていた。

「俺も嫌いじゃないぜ」

「そうだろう？薄い膜の奥でも太陽がこんなに近くに見えるんだからな」

「ああ。それは羨ましいと思うこともあるが、人間に戻ろうとは思

えないな」

帯解はそう言って佐久間の隣に不自然にあいてあるスペースに座った。

佐久間はベンチの端に座るのが癖となっていた。

それは昔、犬を飼っていてそいつが図々しく人様の膝に頭を乗せて眠ることを生きがいとしていた老犬がいたからだ。

「そうか？俺は人間に戻るのも悪くないと思うがね」

「太陽の光を浴びられるからか？芝生に寝て風を感じながら過ごすのも映画の中にしか残っていないさ」

「今は逃げられないように人間は一箇所に集められている。自由を奪われ、番号で呼ばれ管理されている…だったかな？」

「教科書ではそうなっているな。実際はどうなのかはわからないが、少なくとも優雅ってわけじゃなさそうだな」

「どうして？」

「優雅ならばお金持ちが人間を捨てるわけないだろう？」

「違うないね」

佐久間は携帯灰皿に煙草を押しつけて、紫煙を吐いた。

舌の感覚もほとんど無い。味もしないが、吸っていると気分がマシになる。

「再生医療の研究がどういうわけか吸血鬼細胞を作ってしまった。それが悲劇の始まりになるのか」

「そう思っているのは現場の人間だけだと思う。凄惨な光景を知っているのは俺らだけだろう？」

「…網羅製薬と心羅製薬の人間は全て知っている」

「話を聞いて知っているのとこの目でこの手で感じる現実とは全く別なものさ」

佐久間はこの手を、と言った時、無意識に手をあげていた。何人の吸血鬼を、何人の人間を殺したのだろうか。その両者とも言えない異質な生物を何匹殺したのか。

今のこの世界では警察官など存在せず、民間の企業が雇用している警備隊で治安が守られていた。

佐久間と帯解は同じ網羅制約の警備隊だった。

網羅製薬と心羅製薬の大きな違いは一つだけ、再生医療として吸血鬼細胞を扱っているか、肉体活性化剤として吸血鬼細胞を扱っているかだ。

概要は何も変わらない。名目が違うだけで吸血鬼になりたいっていうクライアントを説得する方法が変わるだけだ。

「それでも俺らは続けるしか道はない」

「わかってている…そんなこと。警備隊へ入ると決めた時から俺は覚悟はしている」

「いつか…いつか来る日が怖いんだろうな。俺だって怖い」

「そうだろうな」

「もし…もし…そうなった時、佐久間が俺を殺してくれよな」

帯解の言葉に返事をする事なく、無言で煙草を取り出した。

火をつけて紫煙を吐き出す中、帯解は静かに去って行った。

いつもこうだ。

隣には不自然なスペースがあつて、俺は振り向くのを辞める。

そこに誰もいない現実を知ることが怖いんだ。

帯解が失踪したのはそれからちょうど五日してからだった。

網羅製薬関連病院

失踪して七日経つと自動的に免許が失効する。ライセンス

おひとけつじ帯解勇次は吸血鬼の細胞との適合検査の時に大量の薬物を自らの肉体へ投与していたことを佐久間は知っていた。

悲しいことに少ないことではない。貧富の差が激しい格差社会で生き残る方法は命のリスクを取るか、血を捧げ続ける家畜となるか。

今日は六日目の夜。まだ雨は止まないでいた。

佐久間は車から降りて地下スロープを歩いていた。

網羅製薬の関連病院の特別社員用、もっとわかりやすく言えば警備隊ベークゼ用の入口が地下にあった。

一般的にはハンターと呼ばれる種族。製薬会社には必ず存在しているのだが、忌み嫌われる存在であるゆえに人の目を避けて生きていた。

その理由の最も大部分をしめるのは身内を殺された人間が多いためからだろう。

同じ家族。同じ遺伝子でも細胞が拒絶の有無は違った。

妹が拒絶されて兄が適合出来ることもある。

程度の差はあった。妹が拒絶されていてもいくつかの投薬を続けていれば拒絶反応を弱めることが可能で異質な存在になることもない人もいた。

その一人が妹の佐久間陽子だった。

「あ…お兄ちゃん？」

ガラス張りで囲まれた病室をノックすると陽子がニコツとほほ笑んだ。

「わかるのか？」

「うん。お兄ちゃんの叩き方は優しいんだもん」

笑みを大きくする陽子へ触れることは出来ない。

触れてしまえば吸血鬼になったことを知られてしまう。佐久間はガラス越しにしか会話が出来ない。

陽子の病気は神経系の病気らしく、身体を動かすのも難しい。

その大きな瞳からは光が消えて何も見えていないと聞いた時、吸血鬼になろうとさせたのだが本人が拒否したのだった。

佐久間の両親は暴走した吸血鬼に殺された。

小さな時だ。そんなこと憶えていることに驚いたほどに小さな時。

私はなりたくない、と言った言葉が今も胸に残っている。それは春を待っている雪のようだった。

「どうしたの？お兄ちゃん」

「…ごめん。ちょっと雨が気になっただけさ」

「本当？」

陽子は神経が鈍くなった代わりに第六感と呼ばれる感覚が優れ始めたと言う話をよくする。

人の思考が何となく伝わってくると言っていた。

嘘ならばそれでいいが、本当ならば

「嘘を言っても仕方ないだろうっていうのはダメだよな。本当は煙草を吸いたくてそわそわしていたんだ」

「館内は禁煙だし、身体に悪いよ」

「わかっているんだけどね。仕事をした後は煙草が無いと調子が出ないっていうか何ていうか」

佐久間は小さく笑った。

目の前に隔てるガラスに映る自分の表情。うまく笑えていないな、と胸中でつぶやく。

「お仕事大変なんだね。私も身体が治ったらウンと働くから待ってね」

「そうだな。身体が治ったら二人で遠くへ引越そうか」

「うん。南の島？とにかくあったかい土地へ行きたいな。波の音がすごい好きなんだ」

「ハハハ。そうだな。俺も寒い土地よりは暖かい土地の方が好きだ」

「じゃあ約束だね。私は早く身体を治すから無駄遣いしちゃダメだよ」

「約束するよ」

ベッドの上で右手の甲をこちらへ向けてあげ小指を立てた。

ガラス越しに佐久間も同じポーズをする。

「ふふふ」

ポーズをした途端に陽子が笑う。

その姿を見ると何となく伝わるっていうのが真実なような気がして怖くなる。

網羅製薬関連病院2

「…どうしたんだ？」

ふいに笑顔が消えた。

陽子はジッと壁面スクリーンの方角を見ていた。

マイクの位置が陽子のベッド付近にあるので雑音程度にしか聞こえないが、どうやらアーリー故障のニユースを聞いているようだった。

「事故のニユースばかり…」

「ああ。アーリーは衛星からの通信を変換するコードがおかしくなっていたって話。メンテナンスだって思えばすぐにおさまるさ」

「そうじゃない」

陽子は小さくそう言った。

「そうじゃなくてあんなカーテンを整備するための機械で大騒ぎするなんて」

「吸血鬼にすれば問題…なんだろうな」

「吸血鬼、吸血鬼、ニユースやテレビやネットは全て吸血鬼を中心に報道している。新人類なんて言い方してさ。優れているとでも言いたいばかりッ」

その言葉は佐久間にはきつく響いた。

だが、声色には見せることなく話を続けることに努めた。

「母さんも父さんも死んだんだ。今更嘆いても仕方ないよ」

「わかっているッ！！ケド…ケド…」

何が言いたいのかは第六感が優れていない佐久間でも手に取るようにわかる。

佐久間が目を落とした先にあつたのは自分の病的に白い肌と長く伸びた爪だった。

思わず目をそらす佐久間。

背後には医者がいて看護師と何か話している姿が見える。だが、佐久間の視線に気づいて場所を移動した。

行き場のない視線を瞼の裏に閉じ込めて陽子の声を待った。

「ごめんね。お兄ちゃん」

「いいんだ。俺も…こんなことくらいしか出来ないから」

「ごめんね」

「俺こそ、ごめんな」

心からそう謝りたい。

まだ兄だと思ってくれている陽子に嘘をついている。

その嘘の為なら命だって捨てても惜しくない。

妹の中の兄である佐久間との思い出を指でくり抜いて捨てられるのならばそうしたい。

吸血鬼の兄がいるのと孤独な一人身はどちらがいいのだろうか、と考えてしまっていた。

網羅製薬関連病院 3

テレビの話とお世話してくれる看護師、正確には網羅製薬の監視員の人の話を聞くことで面会時間は過ぎる。

佐久間はただうなずいて時間が終わる。

全てが嘘で固められた世界に閉じ込められた陽子の笑顔はひどく悲しいもののように見えた。

「そろそろ」

通路を歩いてきた網羅製薬の社員が佐久間の背後からそう耳打ちする。

「面会時間が終わりだそうだ。また明日来るから…」

「…うん」

声のトーンが一つ落ちて陽子はうなずいた。

病院に来たばかりの時よりかは感情を出すようになった。

今じゃ悲しそうな表情も見せられるようになった。神経系の病気は完治することは難しい。

奇跡が起こったとしても満面の笑みを浮かべることは出来ないだろうと言われている。

怒ることも悲しむことも笑うことも出来るのにそれを表情に出すことが出来ない。

だからこそ声や仕草などが何よりも気になる。

「なあ陽子」

「なに？」

「何か…欲しいものってあるか？」

「どうしたの？急に」

陽子は少し明るい声になった。

「早めの誕生日プレゼントなら先週もらったよ。その前は入院一年記念だって。その前は…なんだっけな」

「面会時間延長記念だよ」

「そうだった。十五分から二十分になったんだよね」

「そう…リハビリをがんばったらもつと話せるようになる」

「うん。頑張る。頑張ってまた一緒に暮らせるようになりたいな」

胸がチクリと痛む。

佐久間は息を飲み、心を静まらせる。嘘は慣れるものではない。

「ああ。一緒に暮らせるようになったら家事は当番制だぞ」

「えーやってくれないの？」

「甘えるんじゃない。だから家事の勉強もしておくことだな」

「はい」

陽子は子供のように毛布の裾を摘んで気の抜けたような口を大きく開いた生返事を返してくる。

それが可愛い子に見せるためだったら安心出来る。

この表情は神経疲労が溜まり失神する可能性もある危険な兆候だと聞いている。

「それじゃあな」

佐久間は踵を返し陽子の病室を後にした。

網羅製薬関連病院 4

陽子の病室は専用個室と呼ばれ、精神病棟と同じく隔離された位置にあった。

網羅製薬の社員の関係者で埋められた病室にはそれぞれの嘘で充満している。

たとえば、失踪した帯解の弟もこの病院の個室へいる。

佐久間が所属する網羅製薬警備隊レーベの人間の家族が入院していることが多い。

この病棟にいる人間は全てレーベや下請けレベルの社員の関係者だと言っている。

製薬の社員は全て吸血鬼であり、その家族も同じだった。

レーベや下請け社員の中にも家族を吸血鬼に出来た人もいるが、維持や管理する代金を支払えなくなる問題が深刻になっている。

そういう時に解決するのもレーベの仕事だった。

正規の料金を支払えなくて闇ルートの薬品を頼る事件や薬を盗む事件も増えてきている。

だが、仕事はそういう人間を追いこむことではない。

吸血鬼を維持できなくなり、人ならざる者となった異質な何かを処理することが仕事だった。

一般的に「ヴァーテ」と呼ばれる壊鬼になった吸血鬼の対応として作られたのがレーベだと言われている。

「
…」

バイザーの中央のアイカメラの上についてあるランプが点灯するサイボーグが通路で立っている。

レーベも会社も信用できなくなった吸血鬼用に開発されたサイボ

ーグを見ることも珍しいことではなくなった。

心羅製薬ではレーベの代行をするのも今やサイボーグや対壊鬼人型兵機「ダージュリーガル」へと移行しつつある。

データで管理するか、人質をとって管理するか。

佐久間はサイボーグを横目に通路を歩いた。

エレベータを起動させ、中へと入る。

鉄に囲まれた密室が妙に心地よく感じる。

真っ暗でエンジン音やスロープを流れる車輪の音まで鮮明に聞こえた。

「陽子…」

思わずそうもらした佐久間。

その名前を呼ぶ度に元気だった頃の思い出が溢れてくる。

吸血鬼に襲われた時、両親は命を失って陽子は肉体の自由を失った。

だったら佐久間は何を失った

そう考えてしまいそうになった時、エレベータの扉が開いた。

佐久間は地下駐車場に止めてある車へ歩く。

来客用スペースからずいぶん遠くまで歩かされた駐車場の端にレーベ専用駐車場がある。

ごく丁寧に監視員が常駐する小さな小屋まで置いてあった。

「カードを」

入出をする時は小屋の前にあるカードへIDを置くことが定められていた。

全てが監視されている気分だ。

佐久間はIDを胸ポケットから取り出してパネルに触れさせた。

認証OKの文字が浮き出る。

佐久間は無言で自らの車、太陽光遮断フィルムを全面に貼ってあるセダンであるエイトネーブルに乗り込んだ。

吸血鬼用に開発された車。

だが、未開発の部分も多くあり日中は車内でもサングラスをかける必要があった。

雨の日はかけなくとも太陽が見ることが出来た。

だからこそ、雨は好きだった。

その目で太陽が見えるから。

その時だけ人間だと思え、陽子に触れられると思うからだ。

「エンジン起動確認終了。目的地を入力してください」

ナビに命令して網羅製薬支社へと向かうことにした。

網羅製薬支社

網羅製薬支社は郊外にあった。倉庫や廃墟などが並んでいる風景には馴染まないビルが一棟あった。

そのビルの足元は裾みたいに広がって駐車場に影を作っている。佐久間の車はそこへ置いて外へ出た。

郊外には太陽を遮断するカーテンは存在しないせいで人間がまるでゾンビのような顔をして徘徊している。

「今日で六日目ね」

佐久間はその声で煙草に火をつけようとした手を止めたが、返事はしなかった。

「残り九時間も無いわ」

「…俺の知った話じゃないが」

「あら？冷たいじゃない？相棒なんでしょう？」

「ただ同期ってだけ」

「境遇も似ているし、馬があつたのかしらね」

真つ赤な口紅を塗った女の口角が歪んだ。

名は府内静元製薬会社員の愛人だったとの噂があるのはその美貌ゆえかもしれない。

豊満な胸も隠すことなく第三ボタンまで外しているのも理由の一つであることは間違いない。

府内は真相を知りたがる男を楽しむように見ている。

だが佐久間は興味も無かった。

この女に好かれたのはそうだった理由からだ。

「府内はどうして中へ？」

「自分の会社に通勤して悪いかしら？」

「悪くはないが、どういう風の吹きまわしなんだろうかって腹を探らされる手間を省ける」

「ふふふ。ファンが多いからね私は」

府内は満足げにほほ笑んだ。

その背後には口紅と同じ色をしたスポーツタイプのセダンがあった。

クラシックカーに興味のない佐久間でもその名を知っているほど有名な車だった。

「主任がファンだと思える神経を疑うね」

「昔から言わない？嫌よ嫌よも好きのうちってね」

「俺には見たままに見えるけどね」

「あら偶然ね。私もそう見えるわ」

「どっちだよ」

「さーてね」

上機嫌にサングラスの縁を指でクイツとあげて社内へ歩いていった。

昔の女優みたいにわざと片方のヒールの底を削ってお尻を振って歩く後ろ姿を充分見送ってから佐久間の社内へと向かった。

網羅製薬支社2

織田主任がいるグリーンフィングルームには府内おたがいた。

少数が班となり行動する場合もあるが、ほとんどは一人ないしは二人で処理する決まりとなっていた。

班として行動する時にしかこの部屋は使われない。

慣れない部屋に主任である織田はうろつくと部屋中を動き回っている。

「しつかりしなさいよツ。主任になっただんでしょう？」

「ああ…悪いな」

角に置いてあるソファは府内が置かせたものだった。

ここが専用席だといって班に支給されたお金の大半を使って自己用に改造している。

テレビも冷蔵庫もあり、今度はシャワールームを作らせようとしている計画もあるようだった。

「佐久間も来たんだからこれでは誰？」

「大和やまとと光陵ひかりりゅう。だが、二人はヴァーテの処理に向かっている」

府内は部屋に入ってきた佐久間をちらりと見て織田へ言った。

織田も視線を追いかけて佐久間の顔を見たが、すぐに目をそらして府内へ向き直った。

佐久間はいさつもなく、府内の対角線にあった壁に背中を預けた。

小さな部屋。

半分は府内が占領しているので余計に小さく見えるが、不満は無

かった。

「てつきり新薬投与の実験関連かと思っていたわ」

「…」

「顔に出るのはまずいわね。まあ私には関係ないけどこれ以上班の人間が減って変な奴が入ってくるのは困るわね」

「補充の予定は無い」

織田はきっぱりそう言い切った。

「明日で七日なのにか？」

佐久間がそう返した。

一瞬、間を置いてまた補充する気はないと言った。

「だけど後九時間。探そうっていうのかしら？アツチの中を」

府内は両手を広げて訊ねた。

アツチとは日光を遮るために作られた球体の都市の名称。

吸血鬼はアツチから出ることは不可能とされている。

闇ルートで投与する薬を買い続ける方法などの例外を除いてだが、帯解に限っては街の外へ出ることは考えられなかった。

そのことを最も知るのは佐久間自身だ。

陽子を置いて外へ出ることは考えられない。

「そうだ。身柄を拘束することが出来ればライセンスは剥奪されな
い」

「でもタダで済むとは思っていないわよね？」

「ああ」

「チームで代わりに罰を受けるってのなら反対するわ。逃げたいや

「つは逃げればいいのよ」

「お前達には迷惑はかけないつもりだ。主任として責任を取る」
「押しつけられた役職に価値なんてあるのかしら？」

府内の言葉に織田は黙った。

小隊制になつたのもまだ実験段階であり、主任という肩書も暫定的なものだった。

班の人間が推挙するという方法も認められたために織田へ押し付けられた経緯がある。

押し付けたのはもちろん、府内だった。

「時間が無い。その話は帯解を確保した後にしよう」

「具体的な方法は？」

「情報ネットワークにアクセスする」

「アーリーは故障している」

「だが、マーリーが生きている。自律型なので片方でも生きていれば問題ない」

「手続きは？」

「もうさつき終えた。そのために社へ来る必要があつた。後はお前達のIDを通せばアクセス出来る」

織田はそう言って手続き途中のデータを二人の電子板へ送つたのであつた。

網羅製薬支社3

帯解の行動記録は佐久間と会ってから完全に消失している。
クレジット履歴や位置情報の確認も不可能だった。

「ここで何の話をした？」

あの空を見上げていた日の話。

「世間話さ」

このことを予見させる話をしたことを話さなかった。
話せば帯解のことを裏切るような気がして話せなかったといった
方がいい。

20

「それから何処へ行くっていつていなかったか？」

「いや何も言っていなかった」

「だったら何処へ行ったと思う？」

「俺は病院へ向かった」

「会ったのか？」

「いいや」

短い返答の後に長い沈黙があった。

織田は眉間にしわを寄せて考える。

「病院へ行ったのなら履歴が残らないはずがない。IDを提示する
必要がある」

「ごまかす方法はないのかい？」

「幾つもあるが、患者と会う時にもIDが必要となる」
「遠くで見るくらいなら充分出来ると思うけれどね」
「…それならIDは必要ない」

府内の言葉に織田も納得した風な表情を見せる。

「だが何をしに行った？」

二人に佐久間が訊ねる。

「何って別れを言いに…」

「それだったらIDを使うさ。隠す必要は無い。その後に消えればいいのだから。それに弟を置いて一人だけ消えるなんて考えにくいと思う」

「そうなると病院へはいつていないと？」

「いや病院へは行ったと思う」

「会っていないんだらう？」

「だからさ。会っていないのが不思議だった。あの病院の面会時間は決まっている」

「行っていないからだらう？」

「俺達はどうして吸血鬼になったのかを知らないわけじゃないだらう？面会は必ず行く。何があるうともな」

佐久間はそう言い切った。

織田と府内にはそう言った理由とは別の理由で警備隊レーベに入隊しているのだからないことかもしれない。

心が途切れてしまいそうにならないように、理由を忘れないように、何より明日も生きようと思えるように面会へは行く。

「病院…消えた吸血鬼…病人の弟…雨…」

「雨？」

府内が並べた単語で気になった言葉を抽出して訊ねる織田。

「雨の日は誰だって感傷的になるもんさ。昔を思い出すか、過去を悲観するか、未来を嘆くか」

「衝動的に嫌になって消えたってことか？」

「さあね」

府内が立ちあがった。

「ここにはいないってことだけは確かさ」

佐久間もそう言って部屋を後にした。

府内も同意して部屋を出る。織田はまだわかっていない様子で二人を追いかけたのであった。

網羅製薬関連病院 5

再び病院へ戻った佐久間が車から降りた。

地下駐車場には帯解の車だけでなく、面会時間も終わったこともあり三人以外の車は見当たらなかった。

織田は襟元を正して手袋を外して座席へ投げ入れていた。

「車は…見当たらないな」

織田は佐久間に確認の意味で訊ねた。

その前には府内の車があつて長く細い足だけがすらりと見えてい

る。
「靴は履き替えておけ」

「どうして？靴は嫌いなもの。ヒールの方が綺麗でしょう？」

「…何かがおかしい」

「おかしい？」

「静か過ぎる」

「面会時間が終わったからでしょう？来客がいなけりゃ静かにもなるわ」

府内はそう言いながらもヒールを脱いで革靴を履いた。

病院へ来ることも少ない府内と織田よりは周囲の感覚がわかる佐久間の言葉を信じるのが生還へ繋がると思身をもって知っている。

「…それで中をどう探索つもりだ？」

「弟の病室と肉体活性化剤の保管庫に別れよう。盗まれていたり何か仕込まれていないか確認する」

「だったら佐久間は病室。府内は一緒に保管庫。連絡は無線を使う」

「旧式：だが範囲は病院では充分足りるな」
「ああ。ほらよッ」

織田は車内から無線を二つ取り出して各自に投げた。
三人が一樣に耳にイヤホンと輪郭にそってマイクを調整して繋がるかを確認する。

雑音が気になるのか、府内は舌打ちをした。

「暗号通信で良くない？」

「病院内は管理システム下を通してしか会話出来ないようになって
いる。相手が傍受していたら逃すこととなる」

「それはアツチの中にいたら同じことじゃないのかしらね」

「アツチを管理する政府とのつながりがあるようなやつなら…レ
べなんか入っていないだろう」

「でも病院の管理システムは民間企業だもんねってここにいること
前提で話がすすんでいるわね。いいのかしら」
「…」

ため息を吐く織田。

言いようのない表情がかたまっている。

「帯解は必ずここへ来る」

佐久間は小さくそう言って病院内へ続くスロープを歩き始めた。

網羅製薬関連病院 6

エレベータの前で佐久間が立ち止まる。
ボタンの光でエレベータの昇降位置がわかる。今は五階から降りてきている。

面会に行くには七階の受付を通る必要があった。

「俺は階段を登って向かう」

「何かいたのか？」

「いいや」

織田にそう言ってエレベータの脇にある階段を選び登る佐久間。
吸血鬼となつてからは急ぐ時は階段を使うようになった。降りる時は飛び降りればいい。

佐久間は階段の側面にある壁を蹴って移動した。
妙な違和感が胸にある。

「エレベータに乗ったか？」

「ああ」

「中から誰かは出てきたか？」

「いいや」

佐久間の問いに事務的に答える織田。

暗いわね、という愚痴を言う府内の声が時折入ってくる。

「誰かと会ったら教えてくれ」

「了解。そっちには誰かいるのか？」

「いいや。階段は無人」

「だろうな。そっちも注意してくれよ」

通信が切れたと同時に七階へ辿りつく。

この受付を通れば面会室へ行けるのだが、今は通行許可が出ないだろう。

佐久間は足を止めた。

L字型の受付をする机があつてそこには女性型サイボーグが立っている。

IDをかざさなければ会話をすることも出来ない。

無理に通ろうとすればアラートが院内に鳴り響き、病院警護隊が集まってくる。

「人の気配がまるで無い。ヴァーテが現れたつていう報告は？」

「こつちも誰もいないわよ。ヴァーテがいたら静かつてよりもうっさいって感じたと思うけど」

「そうだが…」

「静かつてのもあなたの勘みたいなものでしょう？第一この時間に病院なんて来たことあんの？網羅の社員なら退社時間よ」

「来たことはないが妹の話を聞いている。夜になろうとする時が一番うるさいつて」

「ストレスのせいで聞こえる幻聴の可能性もあるし、眠たい時つてすぐく神経が尖つたりもするでしょう？それじゃないの？」

「何にしても患者がいるんだ。医者が何処かに常駐しているはずだ」

い。佐久間は受付の手前にある診療室を一つずつ覗いたが、誰もいない。

「あ…そういえば大和も光陵も新薬の関係で病院にいるんじゃない？」

「それは…」

「もう秘密ってことでもないでしょう？」

「ううん…だが…」

「真面目ね。だったら大和と光陵に連絡を繋いでみましょうよ」

「そうだな」

耳に当てたイヤフォンから二人の会話が聞こえてくる。

佐久間は変わらずこのフロアの部屋を調べているが、人の気配がない。

「応答なし」

「だったらGPS機能は？」

「電源を落としている。電源が生きていたとしてもフロアまではわからない」

「だがこの病院の中にいるのは間違えない。だとすると」

「普段人が入らないエリア。上の階だろうな」

織田の顔は見えないが佐久間の脳裏には真上を見上げた織田の姿が過った。

驚くほど鮮明な映像に足を止めてしまう。

「どうかしたか？」

「いや何でもない」

頭を振って先を急ぐ佐久間。

瞼の裏にはもうすっかり映像は消えてしまっている。あれは一体何だったのか。

「あーもうッ！！ダージュリーガルならサーモグラフィで探すんだろうけど」

「無理を言っなよ。人間なんだ」

「そうね。人間。皮肉なものね」

「何が？」

「あんたはバカね。そしてバカを相手するのもバカで。私はバカじゃないの。わかった？」

「バカって…バカって言ったのかッ」

口論になる二人。

織田と府内はよく言い合いになるがバディ組みとなると自然と組むようになっている。

訓練時代もよく言い合いする声を聞きながら任務をこなしていた。

網羅製薬関連病院7 回想

回想

とある事件があった廃ビル群を演習場として使用していた。
心羅と網羅の合同演習に参加していた佐久間と帯解。

「大和ッ！！」

「聞こえてるってーの」

大和がいる方角から爆発音が聞こえたので帯解は生存確認をする。
面倒そうな返答に息がつまりそうな緊張も和らいだ。

「お前は真面目すぎるんだよ」

「心配なんだよッ。相手が人間じゃないからなおさら」

「そうじゃない。人間じゃないからなおさら信用が出来るんだよ」

大和はへへつと笑って通信を切った。

小隊が編成される前。だが、ほとんど互いに知った仲であったこともあり連絡は取り合っていた。

帯解は真面目で優し過ぎる。そして内側に溜めこむ性格でこういつて感情を表に出すことも少ない。

だが、大和と光陵には感情を表に出すことがしばしばある。

二人は血の繋がらない兄妹だった。

ちょうど帯解の弟と似たような年齢。ほんの子供の二人が吸血鬼となった経緯は詳しくは語りたがらない。

府内がずけずけと質問しても大和がはぐらかす。

「心配している場合じゃない。ダージユは必ずこのビルの中で仕掛けてくる」

「…また勘か？案外お前には超能力つてのがあるんじゃないか？」

佐久間は廃墟の階段を登り続けている。

背後を帯解がついて歩いている。

「そうならいんだが…府内と織田の動きをみる限り隣のビルで階段を登っている。おそらく追われていると思う」

「どうして？」

「通信を聞けばわかる」

「通信？だってあいつら愚痴ばかり言っているだけだろう？」

「言い合いの程度で敵との距離がわかる」

「なるほど…」

敵が視界に入ると府内の罵声が始まり、姿が消えて気配も消えると織田が言い返し始める。

府内は変わらず罵声を続けるが織田は緊張していると無口になる。それがリーダーよりも正確なので通信をわざと残して耳を傾けているのが佐久間だった。

いつだってあの二人は喧嘩をしている。だがバディを組み続けているのは互いに認め合う部分があるからだ。

二人は特別な力を持っていた。

それは同じ警備隊の中でも異質と思えた。それゆえに近づく人間も少なかった。

はじめて本音で話せる相手を見つけた喜びだね、と大和が言った言葉が印象に残っている。

そう言った大和と光陵も特別だった。

さきほど話した超能力というものがあるとしたら大和と光陵の兄妹の方だろう。

実験的に産み落とされ、施設の中で育った。経歴は一切不明で時折子供とは思えないような表情をするのを憶えている。

網羅製薬関連病院 8

「…これはッ?!」

夢から目が覚めたように佐久間はその驚いた府内の声に現実を思い出した。

病院は寒い。

閉鎖的で閑散とし過ぎている。薄暗くてまた何かを思い出してしまいそうだった。

「佐久間ッ!!こっちに問題あり」

「…どうした?」

「ダージュリーガルが四対…いやもつといるかしら」

「それがどうした?網羅と心羅は対立していないはずだが…」

「だからこそ厄介なのよ。カメラ送るわ」

佐久間は電子板を取り出して府内から送られてくるデータを確認する。

映っていた室内の様子。

「惨劇…誰が…」

ダージュリーガルの四肢が千切られオイルの海に沈んでいる。何体か識別することは難しい。

「この部屋は薬の部屋か?」

「いいえ。薬を管理する薬剤師長の部屋よ。記録を見せてもらおうと思って」

「その薬剤師長は？」

「わからないわ。オイルの匂いとパーツが散乱しているから識別は難しいわね」

「人影は？」

「織田が薬の在庫を調べるコードを探しているわ。でも何か盗まれていると思ったらアラートが鳴るでしょうけどね」

「府内の声色が慎重だった。」

< ツ! ! >

「まただ…また…また映像が見えた。」

「府内がハンドガンを片手に室内を見回している姿が見える。」

「胴体部分を剥がしてその下にも潜んでいないかを確認していた。」

「誰もいない」

「…えっ？」

「何でもない。それより警備隊の姿は？」

「見えないわね。止めた様子もない風に見える。何より遺体がないわ」

「遺体がない…か。それは犯人かすでに殺されているか」

「そのどっちかでしょうね」

「佐久間はハンドガンのグリップの底で自らの頭を軽く叩いた。」

「映像が消えて薄暗い廊下が目の前に見えた。」

「落ち着かない心音と妙に冴えた頭が不均衡だった。」

「帯解…では無理だろうな」

「そうね。リーガルをこれだけ瞬時に相手を出せるわけないわ。そうなるって団体ね。網羅の関連病院を襲ってくるなんてヒューケしか

考えられないわ」

ヒューケとは財力や権力を持つても吸血鬼にならなかった人間が設立したと噂される団体だった。

吸血鬼を忌み嫌い、人間解放を目的に活動している。

「ヒューケは吸血鬼嫌いだ。手を組むとは考えられないな」

「だったら別の事件がたまたま今夜起こったとでも言うのかしら？」

「：わからないが、報告と応援を」

「もうやっっているわ。すぐに本部から来る。それまでは互いに慎重に動きまし 織田ッ！！」

「どうした？」

「叫び声：何かいるわ」

府内の足音が聞こえた。

織田の通信が切れたことに気づいていなかった。マイクで織田に呼びかけても返事はない。

「クソッ」

佐久間も織田の元へ向かおうとした。

その時だった。

また映像が見えた。

「これは…」

その映像が佐久間の足を止めたのであった。

網羅製薬関連病院 9

眠った陽子を抱いている帯解がいた。

振り返る佐久間。だが、受付のサイボーグが正常に起動している段階で人が入れるとは思えない。

「あり得ない」

そうもらした脳裏には府内との通信の時に見えた光景が過った。帯解は陽子をさらおうとしている…？なぜ？どうして？疑問符が浮かんでは混乱は増していく。

「織田ッ！！」

「大丈夫ッ！！！マイクが飛んだだけ。今拾った」

「状況はッ？！」

「ヴァーテが中にいる…と言うよりはヴァーテになったレーベか？」

「どういうこと？」

「レーベの服を着ているヴァーテが薬品を喰ってやがる」

織田のマイクからは銃声がした。

府内が走る音とハンドガンで応戦する音が続いた。

「クッ…どうしてこんなことに？」

「レーベの新薬の実験だって言っていたがな」

「だとすればこれは大和と光陵の可能性も…」

「ない。骨格が大人だ」

「でも…奥にもまだいるわ」

「ああ。いったん逃げよう。出口まで援護してくれ」

雑音が続いてヴァーテだと思われるうめき声も聞こえる。
銃声が重なって全ての音が互いに衝突し合って個別の音が判別出
来ない。

「何があつた？おい！！」

佐久間の声に返答はない。

「クソツ！！行くしか」

佐久間は頭を押さえる。割れそうな痛みにも不協和音のような音が
聞こえる。

やがてそれは人の声となり、佐久間の名を呼んだ。

「誰だツ?!」

佐久間はもがきながらも叫び返した。

薄暗い廊下を見渡しても姿はない。サイボーグが立っているだけ
だ。

サイボーグが呼んだ？まさかと思ったが声の方角は病室の方だっ
た。

「佐久間…佐久間…」

「誰なんだツ!!!」

「俺を止めてくれ…」

「ツ?!」

帯解の声だと気づいた。

佐久間は目を見開いて確信する。陽子を抱いているのはやはり帯

解でその光景は白昼夢なんかではなく、現実ってこと。

「…悪い。俺はそっちへは行けない」

「は？なんて？」

「帯解の場所がわかった」

「はい？なんて？帯解を見たのか？」

織田にそう言って病室へと走り始めた。

網羅製薬関連病院 10

「受付の時間は終了いたしております」

「緊急事態だ。IDを照合して本部へ転送と応援を要請する」

佐久間はIDをスキャンさせるためにサイボーグの視線と同じ位置にIDをあげる。

アイから赤外線が射出され、IDのデータを読み込む。

「面会の時間は終了いたしております」

「だからッ！クソッ」

「申し訳ありませんがまた後日出直してください」

サイボーグは嫌に丁寧な言葉で受け答えをしてくる。

あの映像は消えたが、確かな確信は胸に残っている。

「理由は説明出来ないが、中にライセンス失効中の…ってまだかッ
！！」

佐久間は焦りが募る。

ライセンス失効した吸血鬼を追うためならば緊急措置として通ることが出来た。

その許可も得ることが出来た。だが、まだ数時間はレーベの一員として動ける。

「何を迷うことがあるッ」

佐久間は強行突破を決めた。

ヘッドフォンから聞こえる雑音が嫌な予感を突いて破裂してしま
いそうだ。

「後で報告をするから頼むッ！！通してくれ」
「申し訳」

何度も同じことを言うサイボーグのモニターを鋭く伸びた爪で引
っこ抜く。

オイルに染まったアイを手の中で潰した。

緊急アラームが鳴り、このフロアのシャッターが閉まった。

真っ赤な光に染められる廊下にサイボーグが横に倒れて壊れる音
が響いた。

「悪いな」

佐久間は振り返ることなく陽子の部屋へと走ったのであった。

網羅製薬関連病院 11

部屋はガラス張りなのだが、面会時間以外はガラスが曇って中の様子が確認出来ないようになっていた。

陽子の部屋は奥から二つ目だった。

佐久間は部屋の入口に立った。

「そっちに何かあったのか？アラートがひどくうるさい」

「何でもない」

「何でもないわけないだろう？帯解も見つけたってッ」

佐久間は面倒になり、ヘッドフォンを捨てた。

弾力がある廊下に滑ることなく足元へ落ちた。それが気に入らなくて足で踏みつぶす佐久間。

中から細かな部品が膝辺りまで飛び散った。

「どうかかなりそうだ」

アラートのせいで興奮する自分。吸血鬼になってから感情が抑え切れなくなっていることに戸惑う。

適合出来なくて薬を服用することもあるが、佐久間の場合は珍しく適合し過ぎるのを抑える薬を服用していた。

根っからの殺人鬼だと言われているようだった。

薬を飲まなければ心地よい殺戮衝動が胸に広がっていくと怖くなる。

「IDを照合してください」

「…どうせ無理なんだろうがッ!!」

佐久間は扉を殴り、中央部分をくぼませる。
くの字に折れた扉から少し開いた隙間に指を入れて扉を引きちぎ
る。

まるでバケモノだ。

陽子が眠っていることは知っていた。映像だけでなく、薬の投与
の副作用で朝が来るまで眠ってしまうのだ。

「佐久間か…」

「帯解ッ」

部屋の中心で陽子を抱いた帯解が待っていたかのようにその名前
を呼んだ。

網羅製薬関連病院 12

「どうしてここへ来た？薬品管理室ではヴァーテが暴れているぞ」
「…あれはお前が引き起こしたことなのか？」
「いや違う」

やけに落ち着いた様子の帯解。本当にやつなのか？
あの時、俺を殺してくれといった帯解の顔が思い出せない。

「だが、次のニュースでは俺らのせいになるだろうな」
「俺らのせい？」

帯解は瞬きもせず、に佐久間を見返してる。

腕の中にいる陽子の呼吸が気になって陽子の顔を見る佐久間に帯解は続けて言った。

「いつまで続けるつもりなんだ？」

「…陽子が生きている限り」

「だろうな。お前は悲しい生き方をしている。哀れだ。こないだまでの自分を見ているようだな」

「何があつたツ？！お前にも弟がいるはずだ」

「弟はもう助けた。この病院にいる全ての子供達を俺は保護するつもりだ」

「保護…？」

「そう保護。ここにいれば人質として生かされるだけだ。外へ出て俺らの組織へ来れば自分の意思で生きることが出来る」

「お前の組織…ヒューケか？」

佐久間はそう訊ねた。

「そうだ」

帯解は間髪をあげずに答えた。

「ヒューケこそ、正義」

「正義か…だが、現実はそのような曖昧な幻想では過ごせない。ただ一時薬を奪ってもすぐに切れてしまうぞ」

「薬か…吸血鬼で要るために薬が必要ならば吸血鬼を辞めればいい」
「簡単に言うなッ。そんなこと」

「出来るんだよ。ヒューケの技術は我々が思っているよりも何倍も発達している」

「信じられないな。そうであれば網羅と心羅に対抗する製薬会社を作るはずだ」

「信じる必要は無い。時期がくれば…時間が経てばお前なら必ず答えに辿りつく」

「答え…？」

「その時にまた会おう」

「待てッ！！」

帯解が後方へ軽く跳躍する。

慌てて佐久間は手を伸ばした。

網羅製薬関連病院 13

「辞めてッ」

陽子の声が聞こえた。

耳の奥、頭の奥、それは心の片隅に残っていた記憶の中の声に思えた。

揺さぶられる四肢はぴったりと張り付けられたように動けなくなる。

ふわりと帯解が着地した。

「この声は…何ッ」

「サイレントヴォイス…やはりこの子にも…」

「何だそれはッ!！」

「心に直接話しかけられる第七感」

「第…七感…?」

「そう第6感でこの世界とは違う異世界のことを感じる。そして第七感で異世界と現代を繋ぐ」

「何を言っている?」

「実験だよ」

「実験?」

「生態実験を行っていたんだ。吸血鬼とは肉体の進化。そして第七感を開くのは精神の進化」

「進化?それは一体ッ」

「…すまない佐久間。俺は全てを知らない」

帯解は本当に申し訳なさそうな顔をして目を伏せた。

視線が陽子のへそ辺りに落ちて顔を歪ませる。歯がゆい気持ちを

感じている様子に戸惑う佐久間。

「だったら教えてくれ」

「…」

「俺はどうすればいい？」

「…」

「お前を切り刻んで陽子を取り戻せばいいのか。お前を逃してヒュ―ケを連れて行けば陽子は救われるのか」

「…後者だ」

帯解はたっぷりと間を置いてそう答えた。

「それを信じると言うのか？」

「ああ。それが真実だからな」

「確信が持てない。それならば俺も一緒に連れて行け」

「それは出来ない」

「どうしてッ?!」

「…」

「だったら陽子を置いていけ」

佐久間は爪を立て、そう言った。

「無理だ」

「だったら」

佐久間が地面を蹴り、陽子を抱えた帯解へ襲いかかろうとした時、部屋の中にいたもう一人の存在に気付いた。

それは天井から佐久間目がけて一直線に飛びかかってきた。

細い四肢。腹だけが異様に膨れて栄養が足りない子供のような姿をしている。両掌を頭の上で重ねて、長い爪をドリルのようにひね

っていた。

佐久間は避けきれずに肩を抉られた。

「ヴァーテ。苦しみ絶望する異形の存在」

帯解は小さくそうもらしてから右手を背後の壁へと押しつける。掌から真つ暗な闇が現れて波紋を描くように円を押し広げていく。やがて人が充分に通れるほどのサイズになった。

「待てッ」

その闇の門をくぐろうとする帯解を追いかけようとする佐久間へヴァーテはもう一度、攻撃を仕掛ける。

爪の威力が強すぎて弾くことも難しい。佐久間はさっと避けて再び門へ手を伸ばしたが、届かなかった。

門は閉じて陽子と帯解を飲み込んだのであった。

ヴァーテは部屋中を飛び回っている。

影から影へと姿を消してまた影から現れて佐久間へ襲いかかる。

佐久間は反撃の隙を窺っているが、避け続けるだけで手いっぱいだった。

「どうしてヴァーテがこんなところに？それにヴァーテがどうやって中へ入った？」

ヴァーテの爪がスーツの裾を切り裂いた。

黒い紙きれが宙に舞う中、佐久間の足音だけが室内に響いた。

「帯解も…どうやって中へ？あのゲートは何だ？」

「たツたツ」

「何？喋ったのかツ?!」

何か言おうとするヴァーテ。姿は見えないが、うめくような声だけが影を移動している。

「クツ」

そのおかげで佐久間に飛びかかってくる前から位置がわかる。

だが、ドリルのような爪を止める手立てはない。手持ちの武器はハンドガンだけ。残るは自らの爪と牙。

「くらってくれよッ」

佐久間はハンドガンを片手に声の聞こえる方角へ銃を撃ち続けた。足元に転がる薬莢。銃声。跳弾して室内を暴れ回る弾。全てがせわしなく入り乱れていた。

「た、たッ」

影からボトリ、と何かが落ちた。

転がり続けていた薬莢がヴァーテの崩れ落ちた身体に触れて止まった。

佐久間は倒れるヴァーテの頭を踏んだ。

「何処から入ってきた？」

「た、たッ」

「そしていつからいた？お前は帯解の仲間か？」

「たっ、た」

「舌を噛むなよ。お前には聞きたいことがまだまだあるんだからな」

かかとをヴァーテの開いた口元にねじ込んで佐久間は冷酷な口調で言った。

冷たい床と違ってこいつは生温かい。

「ッ。ッ」

「話せないならつなずいて答える。さもなければこいつでお前の四肢を撃ちぬく」

「ッ。クツエ」

パンパン、

銃声が二つ鳴る。

ヴァーテの膝の裏に一つ。もう一つは長い爪の中央部分に一発。

爪は割れて血の池へ沈む。

ドクドクと流れ続ける血。もう踏んだ足をどうにかする気力さえも無い。

「最後の質問だ。よく考えて答えろ」

佐久間は足を退ける。

代わりにハンドガンの銃口を口の中へと押し込んだ。

その銃口を奥歯でギリギリと噛むヴァーテ。

「どうしてここへいる？」

「た、た、たすけ」

パン、と甲高い銃声が言葉尻を奪った。

帯解が助けて、と言ったのではなくヴァーテが助けを求めている？だが、確かに帯解の声で佐久間の名を呼んだ。

勘違い…意識の混同…考えられるのは無限にある。

ヴァーテは本来、混乱して暴れ続ける。痛み、体内にある別の存在に、拒否する代わりに暴れるものだった。

「助けて、か」

佐久間は最後に言おうとした台詞を口に出して言った。

ヴァーテは錯乱して会話することさえ不可能だとわかっていった。しかし、こいつは話せるような気がしていた。

理由を話せば抽象的になりすぎる。瞳に光があったとか表情が残っていたとか。

確信は無い。

佐久間は誰もいなくなった部屋で立ち尽くしていた。

「帯解はどうやって入った？」

室内を見渡しても入口は一つしかなく、その入口へ行くにはサイボーグを通らなければならない。

もしも通れたとしてもID照合しなければ開かない扉があった。壊された後は無かった。

くの字に中央がくぼんだ扉を見おろして思い返す。ひどく曖昧で虚ろな記憶だが間違いは無い。

「我々のせいになれる？ヒューケのせいに？」

会話も断片でしか思い出せない。

それが真実だとすれば網羅製薬側が招いたことになる。

だが、そうだとすればヴァーテがここへ来た理由も考えられる。

ヴァーテは陽子を殺す為に潜んでいたのだろう。

それに気づいていた陽子が帯解を呼んだ？

つじつまを合わせようとしているだけに過ぎない推測を重ねても

答えは出なかった。

佐久間は廊下へ出た。

「静かだ。やはり網羅が招いたのか？だとすればヒューケの人間が院内にまだいる？」

アラートも鳴り止んで人の気配もない廊下。

「こっちかッ！！」

「違うわ」

「だとすればッ」

「下手クソね。逆でしょうッ使えないわね！！」

織田と府内の声がかすかに聞こえた。

足元の壊れたイヤフォンと配線がむき出しになったマイクを拾い上げる佐久間。

ザザザ、というノイズに紛れて声がする。

何かと交戦中だということがわかる。

「確かレーベの服を着たヴァーテだと言っていたな」

同時に帯解の言葉も思い出す。

俺らのせいにされるだろう、と。そうならば服を着ているのはど

ユーケの制服のはずだ。

また別の事件なのか？偶然か、はたまたこれも何か理由があるのか。

嘘と真実が境界線を越えて交わっていく。

頭の中にある事実を整理しようと佐久間は思っ
て織田と府内のいる薬品管理室へと向かった。

網羅製薬関連病院 16

扉から入ろうとする佐久間に四つの銃口が向いた。

「何だあんたか」

大和が不機嫌そうに銃をおろした。

足元には何とも言えない光景が広がっている。
見慣れた光景だと言っても目を背けたくなる。

「何かあったのか？無線は途中で途切れたし」

「ああ。帯解が現れた」

「帯解が？それでやつは？」

「何人かの人間を連れ去って消えた」

「消えた？わかるように説明してくれ」

織田は血を大量に含んだレーベの服を血の海から引き揚げる。

ロゴや認識番号が読めるかを確認するが、手掛かりがないようで薬品棚に乱雑に置いてはまたヴァーテが着ていた服を拾い上げる。

「話せるほどまとまっていない。だから俺もここへ来た」

「…と言うことは逃げられたのね？」

「ああ。閤色のゲートを開いてその中に…その中に陽子を抱いて消えた」

「妹さんね？」

「ああ…妹だけでなく多くの患者を連れて行ったと言っていた」

「ふーん。それにしては冷静ね」

「…」

「もっと慌てふためくかと思っていたけど」

府内はデスクの上へ座り足を組みながら話している。ぶらんと垂らした二つの細い足を交差させて退屈そうに織田の作業を眺めている。

「新薬：第七感への移行が確認されたモデルだけが消える」

「第七感：確かにそう言っていたが？光陵？」

「…」

光陵はそれ以来何も返事することなくうつむいてしまった。

部屋の角にもたれかかって爪を噛んでいる。

「こつちの情報も出さず。この服を着ているのは同じレーベの人間。新薬を飲んだ途端にこうなっちまってまあ…：研究員や医者なんてのはすぐに消えちまったけどな」

「大和達は平気なのか？」

「まあな。飲んでないってのもあるけど」

「運が良かったんだな」

「違うぜ。光陵が最後に回してくれって言ったから逃れられた。その噂の第七感つてのがあるのかもな」

「たとえば…：人の脳に直接話しかけられるとかか？」

「さあ？」

大和は肩をすくめてわからないと言った。

佐久間は光陵へ聞くこうとして視線を送ったが、大和が自然に二人の間に割って入った。

「帯解がヒューケを自らの所属する組織と言った。この件もヒューケのせいにするために網羅が仕組んだと言っていた」

「何のためにそんなことするのかしらね？」
「それを聞こうとした時、ヴァーテに襲われた」
「ヴァーテが？それはレーベの服を着ていたの？」
「いいや」
「だったら…何処から入ってきたのかしらね？」
「わからない。入口には俺が壊すまでサイボーグが立っていた」
「その帯解みたいに闇色のゲートをくぐってきたのかしら？」
「もしくは網羅の職員が放った」
「帯解を捕まえるために？それともバレたくない何かを消す為かしらね？」

府内はハンドガンの弾数を確認しながら訊ねた。
グリップを真つ赤に変えて銃身を白銀にしている特注品。フレームが純金ではなく金メッキなのが気に入らないとよく口にしていた。

「後者だろうな」
「だと思っから佐久間も妹を帯解に任せて応戦したんでしようね」
「帯解なら悪いようにはならないさ」
「帯解ならね…私なら任せなかつたわね」
「それはどっちの意味だ？」
「私が帯解の立場って意味と私が佐久間の立場って意味の両方」
「…自分のチーム全員なら誰がどうあろうと信じてるよ」

府内の言葉に織田がそうきっぱり答えると府内はつまらなさそうな表情をした。

「何も残っていないだろう。後は鑑識を待つ」

「それでどうするつもり？」

「さあ…応援を待つ」

「ここじゃないところであって言うてくれると喜んで従うわ」

「外へ出ようか」

室内から洩れた大量の血が通路に扇状へ広がっている。

府内は血を踏まないように机を蹴って扉に掴まり、腕を中心に自分の身体を通路へ投げ出した。

綺麗な着地に満足そうに微笑むのを横目に織田と佐久間が通路を出た。

「まだ…何かいるのかな？」

「おっと口調がリーダーっぽくないぜ」

「いや…まあ…うん」

「無理する必要ないけどその喋り方治せよ」

「悪いな」

「頼むぜリーダー」

弱気になりそうな織田の背中を押して大和も通路へ出る。その背後を寄り添うように光陵がいた。

「もしも帯解が言ったようにこれが仕組まれたことだとすれば応援を呼んでも来ると思うか？」

「来ないと思う。それでも網羅の病院でこれだけのことがあれば出動せざるを得ないさ」

「そっだといいがな」

「…?」

「アーリーが故障しているのも偶然でないなら…悪いことになりそっだ」

佐久間の言葉に織田はふいに天井にあるカメラを見上げる。

「生き証人がいれば大変ね。それが万が一、ヒューケに寝返ってその証拠を世界に流されてしまったら網羅は世論から強いバッシングを受ける」

「証言なんてものに信憑性は無いだろうな。あつたとしてももみ消せるだけの力はある」

「他人事みたいに言うけど怖い話ね」

「だからこそ信用出来ることもあるってこと」

「たとえば?」

「何もかも…俺らがついた嘘を真実にしてくれる」

「逆もまたしかりってことで今の状況だとすんごい嫌な発言に聞こえるわね」

「悪いな」

「謝られると余計にむかつくわ」

ゆっくりと立ち上がり織田に軽口を叩く府内。

「ッ!」

銃声がした。

「他に誰がいるようね」

「ああ。判断がつかない以上行くしかない」

「黙ってついてこいって言えばリーダーらしく見えるんじゃない?」

「ああそうだな。悪い」

その返事のため息を吐く府内だった。

銃声がしたフロアへ向かった。

音は一発じゃなく、複数発。それも同じ銃声でなく複数の銃が使われている。だが、撃ちあっているようには聞こえない。

「ヴァーテが大量にいるようだな」

「防衛ラインを作って近づけないようにって線が濃厚だぜ」

「このフロアは仮眠室と…NICUか」

佐久間は廊下に書かれた表記に眉をひそめた。

NICUとは新生児特定集中治療室のことで産まれたばかりの新生児がたくさんいる。

「知っていて置き去りにしたのね」

「…」

「新生児が全員無事なんて急に襲ってこられたって言うのに疑いもたれるわ。新生児が殺されれば世論も味方してくれる」

「…赤ん坊は口を封じる必要がないだろうしな」

佐久間は府内に棘のある言い方で返した。

この話は辞めておこうと思ったのは光陵がこの手の話をやけに嫌がるからだった。

動物と子供が傷つけられる話はたとえ童話や作り物の話でも嫌悪感を露わにする姿を全員が知っていた。

府内は普段ならば皮肉の一つでも言うが、今回は大人しく引き下がってくれた。

「だが守っているのなら誰か残っているのだろうな」

「この守りはダージュリーガルが行っているはずだ」

「記憶は消せる…か。アーリーの故障が終わりデータ更新が行われる時に網羅社にある各個体も点検される」

「初耳だ」

「まだ確定情報じゃないから電子板にも乗っていないよ」

織田はそう言って自らの電子板にしかない情報を再確認し始めた。クモの巣へ飛び込んでしまったみたいにもがけばもがくほど絶望がある。

佐久間達は蝶なんかじゃなく、招かれていない葉が勝手に絡まっただけだろう。

だとすれば蝶は一体…？やはり帯解の言ったようにヒューケと交戦に入る布石なのか？

「今は助けることを専念しましょう」

銃声が止んだ通路から聞こえてきたのは赤ん坊の泣き声だった。

扉の一部が壊されたか、もしくは外部スピーカーのスイッチが入ってしまったのか。

最後尾の光陵は顔を伏せる。それを振り返りちらりと覗いた大和と目が合った。

今はそんな話をしている場合じゃない。今すべきことなのは目の前の子どもを助けること。

「いたッ！！」

回廊を何度も曲がった奥にヴァーテの背中が見えた。

大柄なヴァーテで背を丸めても天井に擦れている。大きく長い両腕をだらりと地面に引きずって迫っていた。

「一匹か？」

「足元に二匹…いや四匹？」

先頭を走る佐久間に織田が訊ねる。

ヴァーテの股の間から数匹の小さなヴァーテが確認出来る。

それらは扉を盾にして籠城しているダージュリーガルの銃に阻まれてじりじりと後退していた。

「どうする？」

「あれだけの銃弾を浴びてまだ立っているのならば倒すのは難しいかもしれない」

「だが、あの図体のでかいやつの際間をぬって銃弾をかわして赤ん坊だけを回収することなんて…」

「無理だ。それならば二手に分かれて囿になるもの。隠れてやり過ぎし中の赤ん坊を助ける班へ分けよう」

織田は冷静にそう言った。

「バカね。こんなもんは倒すしかないのよ」

そう言って府内が特殊弾を入れたハンドガンのトリガーを引いた。

網羅製薬関連病院 19

府内の放った銃弾は巨大なヴァーテの背中にめり込んだ。

皮膚を引きちぎろうとする音が聞こえ、ジュツと皮膚や肉の焦げた嫌な匂いがある煙があがった。

ゆっくりと内部にある銃弾を押し出す贅肉。

からん、と葉莢が地面へと転がると同時に巨大なヴァーテは動きを止めた。

「デカイのはあんたに任せるわ」

府内はそう言って窓へと踵を返した。

「大和も光陵も外へ」

「何をするんだ？」

「ショートカットよ」

数歩で窓の目の前に辿りつき、もう数秒で窓の縁を掌で押した。

窓にハマっていたガラスは全て割れて落下していく。ちょうど大人が一人通れる大きさの出入り口になったでしょう、と府内がほほ笑むと同時にそのガラスが無くなった窓へと身を投げ出す。

身体をひねって窓のすぐ下の壁に着地する。長い髪が強風にあおられている。

「先に行くわ。ついて来られる？」

「余裕で」

大和は光陵の手をとって窓の外へ飛んだ。

勢いをつき過ぎた大和が体勢を崩しかけて慌てるその手を府内が掴んだ。

「奥の部屋よ」

そう言っつて二人を奥のNICUの方角へ腕の力だけで投げた。

「あいよ」

大和はそれを楽しむようにしっかりと光陵の手を掴んで空を滑る。まるで飛んでいるみたいが無茶苦茶な光景に織田は顔をしかめる。廊下にいる佐久間と織田からは大和と光陵が見えなくなった。

壁で屈んだままになっている府内がようやく動く気配を見せた。

「OK.着いたわ。それじゃ頼んだわ」

「いつも府内は危険すぎる選択をする」

「そうかしら？リスクは低いわ。少なくともあのバカデカイヴァーテと戦うよりは院外の壁を走った方がね」

「無茶苦茶だ」

「どうせもらった命よ。失っても悔いは無いわ。それじゃ後で合流しましょう」

府内が壁を蹴る音がした。

長い髪が風に流されている姿が少しだけ見えていた。

「確かに心配している場合でもないな」

佐久間は府内達を見送った視線を廊下に戻した時に見えた光景にそう嘆いた。

ヴァーテは顔を自らのお腹に埋めて背骨の隙間からヌツと顔を覗

かせてニヤツと笑った。

筋肉や皮膚、もしかすると細胞レベルで再構築されたと思われた。ベタツと通路に平たくなる身体。

頭だけが浮かんでいる不気味な生物から筋肉の軋む音や皮膚が伸びる音、骨が割れる音、自らを破壊するそれらの音が不協和音のように廊下に響いた。

「胴長の猫？犬か？」

「どっちでもいいが、背中を擦らないで動けるってのは想定していなかったな」

「ああ…来るぞッ」

織田は膝をかがめて後方へ跳躍しようとした。

だが、

「わおおおおおおおお」

咆哮をするヴァーテ。

足元が揺れてうまく飛べない。膝をグツと沈めて振動に耐える織田。

「まずいッ」

「避けるー!!」

二人が動けない視界に迫ってくるのはあの巨大なヴァーテだった。

体当たりしてくるヴァーテを交差させた腕で受け止める佐久間。

「走れッ！ー織田」

織田はその言葉に反応して弾けるように後方へ跳躍した。

佐久間も身体の衝撃をわざと逃して後方へ吹き飛ぶ。宙でくるりと一回転して体勢を整える。

ヴァーテの勢いは止まらないが、こちらへ注意を寄せることには成功したようだった。

「速いな」

「思ったよりもずいぶん速い」

四足歩行のヴァーテは地を這うように後ろ向きに跳ね続ける二人を追いかけてくる。

時折、大きな口を広げて牙をむき出し威嚇するヴァーテ。よだれが床にこぼれて後ろ足を滑らせるお陰で次第に距離は離せている。

「背後に階段がある」

「見える」

「俺は下へ佐久間は上へ行け」

「ああ」

階段の前にあった廊下を蹴り、佐久間は上へ織田は下へ向かった。

佐久間は後方を確認しながら階段を二つ飛ばしで駆けのぼる。ヴ

ァーテの前足が見える。

昔にもこういった作戦があった。
その時はいつも何故か佐久間の方へヴァーテが来たものだった。
全てがコマ送りに見える。
胸が弾け飛びそうにドクドク言っている。慣れたとは言え、ヴァーテと対峙するのは恐怖を感じる。
こんなにも大型なヴァーテなら尚更。
前足から額。頭に首に背中まで見えた。

「来るかッ」

真っ赤で歪んだ瞳がとらえたのは佐久間の方だった。
佐久間は体勢を変えて階段を蹴り、両側の壁を蹴って上へと向かった。

大柄のヴァーテは階段でももろともせずにグングンと進んでくる。目の前の餌を目がけるようにジッと佐久間だけを見つめている。

「ッ!!」

二人の速度の相対性のせいで自分自身がどれほどの速さで走っているかを感じていなかった。
気づけばもう上の階は無く、屋上へ続く扉が見えていたのであった。

佐久間は扉を肩で壊して屋上へ転がりこんだ。

「わおおおおおわあああ」

ヴァーテも息を切らすことなく屋上へ飛び込んでくる。

「少なくとも三人いるな」

ヴァーテの図体をうごめく三つの楕円形のシルエット。

単体ではこんなにも大きな形になることはなく、拒絶反応を起した複数の吸血鬼が融合した結果と言える。

それぞれの意思が混同し、話すことは出来ずに単純な思考しか出来なくなる。

戦闘で言えば直線的な行動が多くなる。

ヴァーテは素早い動く軌道が対角なので避けることは容易だった。

隙を見て扉の中へ入りまた逃げようかとも考えているが問題はその後だった。

「逃げても追いつかれるな」

思ったよりも素早い。

銃で仕留められる自信は無い。数体の複合体は細胞の再生が異常に早い。

反面、老化が早いので短命で終わるといふ欠点はあるが気の遠くなる話だ。

「一つずつ狙えるか？」

ヴァーテの攻撃を避ける都度、体内に盛り上がっている楕円形のシルエットを撃ちぬく。

苦しむ咆哮はするが、すぐさま、他の部分が盛り上がる。

内側へ引つ込めて新たな核を出したのか。それとも移動させたのか。

効果が見えない手探りのままにハンドガンを確実に当てていく。

「らちが明かない」

苛立ちながらもそれ以外に手はないと核を狙い続ける佐久間。

持久性になると吸血鬼細胞を有する佐久間とてスタミナ切れが心配される。

このヴァーテとの追いかけ合いは思うよりもスタミナを消費している。

「クッ…!!」

目がかすんでくる。

腕がしびれてハンドガンの照準がずれ始めた。確実に当てていた弾が二発に一度、三発に一度と精度が見る間に落ちていく。

ヴァーテの方は疲労も見えない。まだ余裕があるどころか、次第に速さを増している気さえする。

「意思が統合していつているツ?! そんなことはあり得るのか?」

直線的な移動から不規則な動きを混ぜてきていることに気づいて佐久間の焦っていた。

「違う…冷静になれ」

自分の動きが鈍っていることを確認して焦りは穏やかになった。

だが、現実が変わらない。

目の前に迫ってくるヴァーテもそのヴァーテが底なしの体力だと

いうことも。

皮肉にもこんな時、自分が人間だって思えた。

「
ッ
」

ヴァーテの爪が眼前に迫ってきていることに気づくのが遅れた。

佐久間はハンドガンを盾にして爪を塞いだ。代わりにハンドガンの銃身がパツクリと二つに割れてしまった。

「こんなものでは勝てはしないんだろっなッ」

佐久間はグリップを投げながら後方へステップする。

複合体のヴァーテの弱点は意思が複数あること。ステップを繰り返して、いくつかの選択を与えると意思同士の意見の衝突からラグが生じる。

だが、ほんのコンマ数秒。

十分に追いつかれる。

「逃げてばかりだとどうにも出来ない」

少しずつ避けるタイミングもギリギリになってきている。

紙一重。寸前で回避した足元のタイルが割れ、飛び散った破片の一部が佐久間の身体を傷つける。

吸血鬼細胞の常人では考えられない再生能力で傷口は無いが、ポロボロになっていくスーツを見る度に焦りが募っていく。

あくまで再生が早いというだけで不老不死ではない。再生には疲労がついて回る。再生には命を消費する。

「ここから飛び降りて逃げられるか？」

屋上から見える外の景色を横目にそんな考えが脳裏をよぎる。

周辺で最も高いビル。アツチの球体の天井が近く、鳥迎撃用循環機が肉眼で確認出来る。

アツチの薄い膜を破らないために鳥や宙にある異物を除去する循

環機。カメラの部分が小さくて処理する機能が大きいのでコウモリとも呼ばれている。

「ッ!！」

考えていたせいでステップが単調になっていたことに気付かなかった。

冷静に獲物だけを狙い定めていたヴァーテの爪が佐久間の右肩から斜めに振り下ろされる。

「やられたッ?!だがまだ浅いか」

佐久間は傷口に触れて確認しながらヴァーテの背後へと回り込む。破れたシャツ。触れた手には血がついている。だが、その血も蒸発し白い煙となって宙へ流れていく。

再生をする度に身体が熱を持つようになった。

全身が燃えているようだ。

ドクン、と心臓が血液を送り出す音が活発に体内を駆け廻る。

動け、まだ死なすわけにはいかない、と言わないばかりに心臓が言っている。

「た、…」

獣に似た声じゃない声が聞こえる。

「何だ?」

「た、た、」

「何だっって言っただよッ!！」

ヴァーテの丸みを帯びたお尻から丸いコブが盛り上がってくる。

そのコブが震えて、ヴァーテから逃げようとしているように思えた。
もしかすると……？意思の分裂なんてあるのか？と自問自答しながらも佐久間は爪を伸ばした。

そして、爪でコブとお尻の接着面の皮膚を斬ろうと足元のタイルを蹴った。

コブが落ちる。

コブを包む白い膜。またかたまって膜になりきれしていない油分を含む白い液体がタイルに流れた。

佐久間は着地と同時にコブを回収するために低空を滑走する。

白い液体の海からコブを掴んだ。

固まりつつある液体はねっとりと粘着して糸を引いていた。

その糸が切れるほど遠くでコブを持った手を離れた。

ヴァーテは先ほどまでいた中央辺りで動きを止めて痛みを悶えている。

「たすけてッ!!」

コブの中から足が見えた。

佐久間は爪でコブである白い膜の表面だけを斬り払った。

二つに割れたコブ。中には人がいた。

「静かにしてくれ。一体何があった?」

「えと…あの…」

「わりと冷静みたいだな」

白衣を着た女性。

白い液体まみれなのだが、目は虚ろだが焦点は合っていた。

佐久間を見つめる目から次第に恐れが消えていく。

「何があった?」

「…はあ…はあ…」

「それでいい。ゆっくりと呼吸してから答えるまで十五秒やろう」

それから佐久間はゆっくりと十五の数を数えた。

ヴァーテの動向を見守りながらだが、心配はしていなかった。ヴァーテは趣味の悪いオブジェのように動かない。

女性は途中から佐久間の口元を見て同じ数を数え始める。

十の数を踏んだ辺りから徐々に白い液体が気になり、そこから立ち上がる。身体に付着する液体を指で払って十五を数え終えた。

「気持ち悪い…白い液体なんて…お嫁に行けない」

数え終えた女性がそう言った。

「お前は誰だ？」

「あなたはいいい人そう。私は…」

「心配ない。俺はレーベ。ただの護衛役さ」

「使い捨てのって言わない辺りに好感が持てる。レーベの人はどうしても自分は悲劇の主人公みたいに語りたがるもんね」

「何とでも言う方がいい。見たところ網羅の社員でも無ければ院内の関係者じゃないだろう？」

「どうしてわかるの？」

「白衣を着ているが…吸血鬼を見ても目を合わせるなんてあり得ない」

「…医者もサイボーグを雇って身を守るうとしていたような気がする」

女性と言うよりかはまだ子供のようだった。

白い液体を払うと化粧も一緒に落ちる。幼い顔をしている。

「ここへは非人道的な実験が行われていると通報があったの。それ

で調べている民間組織の一員よ」

「民間組織…？ヒューケか？」

「違…わないかな？ヒューケとは厳密に言えば違っけど母体は同じ」

「政府の人間でなく吸血鬼側でなければ全てヒューケさ」

「世間の認識だとそうね。色々と違っただけだな」

女はため息を吐いてうんざりとした表情で嘆いた。

髪についた白い液体がかたまり、取れないとわかった時点で萎える。

「私は霞真理^{かすみまり}。あなたは？」

長い髪の毛を後頭部で一つにまとめながら訊ねる。

髪についた白い液体を留めゴムに使うのを見て実践経験があるようなタフさを感じた。

「佐久間」

「そう。佐久間…レーベの佐久間…陽子ちゃんのお兄ちゃん？」

「ッ!？」

「何？当たり前じゃない？患者の名前もその家族も全員憶えているし、医者も看護婦も全て。それが仕事だからね」

「…帯解っていう人間を知っているか？」

「…弟がいる人だったかな？行方不明の」

その反応を見て帯解との関係が深くないと知る。

だが、ヒューケのせいにされると言っている以上何らかの関わりはあるはずだ。

もしくは偶然なのか？

「他に内通者は？」

「いない。いたとしても互いに知らない方がリスクは低くなる」

「知らされていない可能性はあるのか？」

「ある。末端構成員なんだから」

「…ああ」

末端社員には情報が降りてこない。

ただ任務を言われてこなす対価として報酬あしたをもらえる。

「聞きたいことは山ほどあるが、もう限界か」

ヴァーテの中での再構成が終わったようだった。

少しばかりすっきりした表情のヴァーテが旋回し佐久間がいる方角を見つめていた。

「プロでしょう？私はどうすればいいの？」

「…守りながら戦うことは不可能だ。一人でも勝てるとは限らない」

「はつきり言っただけ私は諜報部員。情報戦を集める以外はただの可愛い女の子だからね」

「あざといな」

「事実を言っているだけ」

カスミは誇らしげに胸に手をやって答えたのであった。

「それともう一つ」

カスミは差し出した右手の人差し指だけをピンと立ててヴァーテの動きに緊張する佐久間に言おうとした時、佐久間が舌打ちをする。

「私は　　と待ってッ」

何かを言おうとしたカスミを抱きかかえて佐久間は移動する。

「首に手を回せ。掴まっている。お前には聞きたいことがある」

「待ってッ待ってッってばッ」

「黙ってる！！舌を噛むぞ」

静かに指示に従いカスミは佐久間の首にしっかりと抱きついた。移動している佐久間は重さを感じながらもしっかりとした足取りで逃げ続けられている。

先ほどの時間で回復が出来ていると実感出来る。身体が軽い。これならまだ何とかなるか、と胸中でつぶやく佐久間。

だが、手は無い。おまけに厄介な荷物まで抱えてしまった。

「どうなっているの？」

佐久間の胸へ顔をうずめながらカスミが訊ねてくる。

ヴァーテの爪が数コンマ前まで佐久間がいた宙を薙いだ空気が震える音が聞こえて不安になったのがわかる。首に回した腕に込めた力が強くなるのを感じた。

「ヴァーテから逃げている」

「…それで？」

「選択肢は二つ。一つはお前を捨てて全力で戦うことッ」

「却下ッ!!!」

悲鳴のように却下、と叫ぶカスミ。

佐久間は不規則に動いて背後を取ろうとしているがヴァーテの爪から逃れるだけで限界だった。

空を薙ぐ爪の一撃が残した残響が確実に鼓膜へ近づいてくることが不安にさせるようでカスミはその音が近づいてくるほどに身を小さく硬直させていた。

身体に力を入れるほどに重しになり、力を緩めるほどに口づるさくなる。

どう転んでも不利になる材料でしかないがまだ聞きたいことが山ほどある。

「もう一つを選ぶかッ？」

「私が死なない方向であれば何でもいいッ」

「だったらこれしかない」

佐久間は対角にいるヴァーテに背中を向けた。

そして同じ方角へ走り始める。グングン、と加速していくほどに首に巻き付く腕が緩くなっていく。ヴァーテの鼓動が遠くなり気が緩み始めるカスミに佐久間がささやく。

「飛ぶぞッ」

屋上を囲む背の高いフェンスへ一足で飛び乗った。

フェンスへヴァーテが突っ込んで足場が揺れる。だが、佐久間は

冷静にタイミングをはかって空へダイブした。

追いかけてようとしてくるヴァーテがフェンスを登ろうとしている姿が遠のいていく。

急激に身体が軽くなった後に重力が倍返しでのしかかる。

その反動で腕の中のカスミは気絶したのを悲鳴が消えたことで確認し終えた。

佐久間はグッとカスミを抱く腕に力を込めた。

「うん…」

「目が覚めたか？」

「…あれ？」

カスミは起き上がり室内を見渡す。

見慣れた無駄に広い仮眠室。正方形の殺風景な室内にはベッドが一つだけあり、隅には折りたたみベッドが積まれていた。

「ここは…？」

ベッドからゆっくりと起き上がり室内を確認するカスミ。

奥には給湯室とシャワールームがあり、インスタントコーヒーの匂いがしていた。

佐久間はカスミの目の前に屈んで声をかけてくる。

「聞きたいことがある」

「あれからどうなったの？屋上でヴァーテに追いかけて」

佐久間はため息を吐いて立ち上がり、うんざりとした表情でカスミを見降ろした。

「飛び降りたのよ」

佐久間の背後、シャワールームがある方角から府内がインスタントコーヒーの甘い香りを漂わせて声をかけてくる。

「あなたは？」

「佐久間の仲間。この病院に置き去りにされたって意味ではあなたとも仲間かもね」

「は…はあ…」

「それで質問に答えて頂戴。時間があまり無いから」

府内は簡易ベッドが積み重ねられてある一角に寄りかかりながらコーヒーをたしなみながら会話を続けた。

「どうしてこの病院にいるの？」

「それはこの病院には倫理違反があると通報があったので内密に捜査していました」

「そんなにベラベラと喋っていいわけ？あなた新人？」

「新人：新人ではありませんが私は人間。あなた達は吸血鬼。勝てませんから全面降伏した方がいい選択だと思います」

「わりとあっさりとしている子ね。まあ度胸も無ければ潜入捜査なんてこれないわね」

府内がそう言って飲みほした後のインスタントコーヒー容器を足元に置いた。

「この際あなたが誰だっていいわ。教えて欲しいのは今の病院の状況」

「あなたって…私はカスミです」

「私は府内。そっちのが佐久間。これで話してもらえるかしら」

「話して…？何を話せばいいのでしょうか？この院内のことなら私よりもレーベの皆さんの方が詳しいはずですが…」

「だったらどうしてヴァーテに取り込まれたのかを教えてくださいませんか。なぜ無事だったのかも聞きたいわね」

「わかりません。取りこまれたのも一瞬のことで」

「ヴァーテは何処から現れたの？ヴァーテになったのはこの職員？」

「いいえ。おそらく違います。この院内の職員は定時で帰っていますので残っているのは管理サイボーグだけだと思います」

「それなのにあなたはどうして残っていたの？」

「それが仕事なので…内密に探っていたことがあります」

「探っていたらヴァーテがふいに襲われたってこと？」

「廊下が騒がしくなっていました。私がバレたので誰かがやってきたのかと思い逃げようとした時にはもう飲み込まれていました」

「それは毎日探っていたのかしら？今日だけ特別ではなく」

「週に二回。勤務シフトによって空いた時間を狙って少しずつ進めていました」

「定時で帰っているならいつでも来れたでしょう？」

「いいえ。定時でも勤務シフトによって残る医師も少なくありません。誰もいないのは滅多にありません」

事務的な対応を繰り返している二人。

佐久間は二人から離れて部屋を出ようとした。

「何処へ行くのかしら？」

「任せた」

「ちよつと！！佐久間が拾ってきた荷物でしょう？」

佐久間は逃げるように室内を後にしようとする背中へ府内からの罵声が追いかけてくるのを遮るように扉を閉めた。

「生きて帰ってくるだけでなく、新たな生存者を見つけてくるとはな」

佐久間が入ってくるなり織田は振り返らずにそう労った。

部屋の中にあるガラスに囲まれた一角に赤ん坊が寝かされたベッドが等間隔に並べられていた。

織田は目を細めて中の様子を眺めている。中には赤ん坊の寝顔を覗きこんでいる光陵に興味なさそうに寄りそう大和がいた。

「ヴァーテも倒せていない」

「わかつている。一人では倒せないだろう。あの子を助けられただけでも相手の戦力の低下と情報の確保が出来た」

「偶然さ」

「何より時間を稼げたこともある。通路も全て破壊し終えて外へはダイジュリーガルが向かってきている」

「破壊するのが早いな。俺を見つけるよりも早く壊し始めたように思えるが」

「ああ。光陵がそう告げたことを実行した。不思議な力だよ。予言よりも先見という言葉が似合う」

光陵はすやすやと眠る赤ん坊の額にちよこんと触れて笑みを大きくしていた。

飛び降りた佐久間を受け止めたのも光陵の先見があったからだと言っ。もうすぐ佐久間と誰かが降ってくると言ったと聞いた。

これも帯解の言う第七感というやつなのだろうか。

「不安定な力らしい。時々、視えるってことなのかを知るのは彼女だけ。大和でさえ何もわからないと言っている」

「感受性が豊かってやつか。それとも超能力ってことか」

「誰も感じられない何かに敏感だってことはわかるが、実のところ何もわからない。同じ班にいなければ馬鹿げているとでも言っただろうな」

素直な感想をもらす織田。

光陵の印象は控えめな少女だった。いつもうつむき加減で大和の影に隠れているが何かを感じると淡々と何をするべきかを命令する。何かに乗り移られたかのように言葉だけが少女の意思を超えて口内から溢れているようだ。

機械的に繰り返される言葉には有無を言わせない強制力があつた。

「帯解はここで実験がされていると言った。第六感を超えた精神の進化を追及している」と

「精神の進化。人間が進むべき道はそこにあると誰かが言っていたな。ヒューケの歴代の指導者だったはずだが」

「マルクス・ウォーレン。彼の子供も自閉症であり差別をなくすためにそう提唱したと網羅や心羅は否定的な意見を持っている」

「網羅も心羅も否定はしていないと思う。ただ肉体的進化をうたっている製薬会社が精神の進化を提唱する思想家を大平に支持出来ないだろうけどな」

「本当は支持し、それに倣うべく進化の方法を考えていたということなのか？」

「さあ？互いに胸の内はわからないものさ。俺にはただの利権争いにしか見えないがね」

織田は複雑な表情を浮かべる。

短い髪の毛に薄い顔立ち。特徴というものをそぎ落とし普通とい

う仮面をかぶっている中肉中背の男。深紅の瞳と鋭い爪を隠せば優しそうな青年に見える。

書物を持って公園にいれば学生に間違えられるだろう。

「…もう一つ、帯解はその実験から助けるために子供達を逃がしていると言った」

「それならば光陵も連れていくはずだと言いたいのかな？」

「わからない。ただ気にはなっている」

「迷っているんだろうな。何を信じるべきか」

「…」

「まあ焦ることは無い。妹さんも帯解と一緒に悪いようにはならないと思う。少なくともそう信じるしか手はない」

陽子のことを思い出す佐久間。同時にそのことを思い出して感じる自分の心を探ろうとするが、水面に浮かぶ泡を掴みたいに触れようとすればパチンと割れてしまう。

佐久間が気になっていることは行方がわからなくなる前と病室の表情が別人みたいだったことだ。

ほんの数日の間に何かがあった。消えた空白の六日で何かがあった。それだけが確かなこと。そしてそこに答えがあると確信している。

網羅製薬関連病院27

「まだなのかな？」

「確かに遅すぎる気がするな」

織田は時計を見上げた。

リーガルダージユがこの部屋から階段を下り、外へと向かったのがちょうど一時間前。玄関までは安全を確認しながら歩いても十五分で辿りつける。

「ヴァーテに出会ったのかな？」

「いや俺の電子板と連絡が取れるように回線を確保している。アツチの中にいれば回線が途切れないようにバックアップもしている」

「ヴァーテに襲われるか外部との連絡が取れるなら連絡が来るようになってるんだとしたら今も連絡が取れるのかな？」

「こつちからは難しい。向こうの言語に合わせられる時間も技術も無かったから待っているだけだ」

織田は電子板を取り出して回線の状況を確認する。回線に不備はなく、ウィルスソフトを使ってバグも確認したが問題は見当たらなかった。

「アツチの回線を使っているならマリー側からの干渉は出来るだろうな」

「もしも…網羅が何かをしようとしているという前提で話せばそうなる」

「疑いが晴れない内は自分で動かない方が得策か。だがいつまでも籠城してはいられない」

「わかつている」

佐久間はスーツの内ポケットを探り煙草を探した。

レーベの戦闘員用の服はいわゆる戦闘専用の作業服ではなく、市街地に馴染めるようにビジネススーツに似たデザインになっていた。

白いシャツの上にベストをかけてその上に重ねるように銃のホルダーを両肩から交差させてわき腹辺りに落ち着くようにしてある。

人によれば腰の位置や足首にもホルダーをつけてあったり、ジャケットの裏側に装備をしてある場合もある。

府内のように機能美よりも見た目を選ぶタイプも少なからずいるがやはり珍しいと言えた。

佐久間や織田のは通常のタイプに銃のホルダーを複数追加してあるベーシックなタイプ。最も多く、これがスタンダードな着こなしと言われている。

「慎重に行動すればいい」

自らに言い聞かすように織田は呟いた。それは心の声が吐露したようなくらい儂い声で佐久間は瞳を閉じて聞いていないふりをした。指に触れた煙草のシガレットケース。過去に誰かが放った銃弾を受け止めた傷跡が生々しく残っている。

中に残っているのは七本。一番左にある煙草を取り出して口に啜えようとしたところで大和と光陵がこちらへ戻ってくる。

「院内は禁煙だぜ」

「…悪いな」

「身体にわりいんだから辞めるよ。煙草がかっこいい時代は終わっただんだよ」

大和はそう言って啜えた煙草をかすめ取り、離れた場所にあるゴ

三箱に煙草を投げ捨てた。

「それでどうするんだ？」

「ダージユの帰りを待つ」

「待つてどうなるんだかね。もう帰っちまえばいいんじゃない？普通に何もしてないしな」

「連絡が取れない内は動かない方がいい」

「つてもよ、問題は帯解が言った言葉だけなんだろう？それだけで危険だーとか何かあるーだの言つてもさ」

大和が露骨に不機嫌そうな顔をして愚痴る。

子供用のスーツは無く特注の服を着ていた。光陵と揃いの学生服に似たデザイン。黒を基調としたモノクロな服装。アクセントとしてディテールに散りばめられた白色が目立っていた。

「それだけで充分だ。仲間の言葉を信じよう」

織田がそう言うつと大和は愚痴っぽく言うのを辞めて代わりにため息を吐いた。

子供にはあまりに長い時間なのかもしれない。光陵も口には出さないでいるが疲労の色は顔に出していた。

「だったらまずはあのお姉ちゃんの話でも聞こうか」

「もうそろそろ冷静に話がまとまっているはずだからな」

「めんどくさいんだよな。全てが」

と佐久間にもらす大和であった。

「何だ？」

「いや煙草を吸ってから入ろうと思ってな」

「そうか。それならいいんだが」

佐久間は通路に立って織田が室内へ入っていくのを見送った。

残り六本の内、一つをとって口に咥えた。ケースからジツポライターを出して火をつける。

通常ならば天井についてある煙感知装置がスプリンクラーを作動させることになっていることは知っている。

「…」

作動が無いことを確認した。

全ての感知センサーが切られていることは防犯カメラも動いていないだろう。天井につりさげられたカメラを横目に佐久間は口から煙草を外した。

今わかっていることは記録をされていないが、監視はされているという事実。カメラの脇にある録画の際に点灯する赤いランプが点滅しているのをただ眺めていた。

その奥にいる誰かに問いかけるような鋭い眼差しを瞼の裏へ隠して煙草の味をかみしめる。

「自分のせいでこうなった、とでも思っている横顔ね」

織田達と入れ替わりに出てきた府内が窓際に立つ佐久間に声をかけてきた。

何杯目かのコーヒーだと気づいたのは時間の経過ではなく、砂糖を入れていないその匂いからだった。府内は杯を重ねる度に甘さを減らしていく。

「そんな人間じゃないのは知っているだろう？」

「そうね。じゃあ何を考えているのかしらね？」

「煙草を味わっているだけだ」

「嘘。もう舌の感覚なんてとっくの昔に消えたでしょう」

「舌が憶えている」

「そうやって昔の面影を追いかけるのね。男つてのは何て未練がましいのかしら」

府内は佐久間の正面に立ってそう言った。視線は佐久間よりも十センチほど低いが女性にしては背の高い方だと言えよう。

「次は嗅覚を失うのかしらね。そうすればこのコーヒーの匂いも記憶しておかないとダメね」

「さあ…何も失わない人間もいると聞いた。モルモットの実験だと確率は均等にならない」

「逆を言えば全てを失う可能性も0ではない」

「ああ。山岸隊長のように何もかもを失い、痛みと孤独と絶望だけを抱えて死を求める人もいる」

「あのおじさんね。湯川隊長みたいにモルヒネと酒に溺れる人もある意味幸せな暮らしなのかもね」

「AIDSやガンの末期の患者と同じ扱いになる。麻薬も処方箋があればいつだって手に入る。お金も充分に支払われる」

「遺族に支払われるはずのお金を前借りしているだけなんだけどね。ほとんどの場合は死ぬ前に使い切り借金生活になって遺族年金でその借金を返しているのが現実」

「…そんな話をしにきたのか？」

「あんたがしたんでしょがッ」

府内が佐久間の言葉にあきれるように返した。

「それで何か話したのか？」

「あの子ね。嘘は言っている様子もないけれど全てを話しているっていう風でもないわ」

「そうか」

「ヴァーテに取り込まれていた前後の記憶も曖昧でショックで飛んでいる可能性も考えられるけれど彼女自身、半信半疑で組織にいたってことは事実ね」

「疑っていた？」

「あまりにもうまくいきすぎていることに疑問があったみたいね。」

「招かれているかのように指示通りに行けば情報が見つかる」

「彼女はまだ新人だろう。あまり高度な情報は扱えるようには思えないが」

「もちろん程度の低いあまり重要ではない話ばかり扱っていたわ」

府内は立っていることに疲れて佐久間の隣に移動し、窓枠へもたれかかる。

佐久間も煙草を革靴の裏で押しつぶしてフィルターを千切り二つにした煙草をゴミ箱へ投げ捨てた。

網羅製薬関連病院29

「悪いなツ話は後回しになりそうだ」

佐久間がそう言ってエレベータがある方角へと仮眠室で自衛用として扱われていたと思われるハンドガンを持借したものを向けた。静かな沈黙がやがてざわめく空気が通路を吹き抜ける。

「いくら何でも多すぎるわね」

「何かが漏れたのか。上に残してきたあいつか」

「確かにこの広がり方はウイルスに似ているわね」

府内もハンドガンの装填を確認して佐久間と同じ方角へ銃口を向けた。

「ヒューケのせいについては生物兵器なのか？」

「パンデミックが出るのを黙認するほど網羅はバカじゃないわ。全ての吸血鬼細胞を求める列が心羅へ歩みを進めるでしょう」

「その先に儲け話があるとすれば」

「中和剤…緩和剤…それともこのアツチ全体で実験しているとも言いたいのかしら？」

「悪魔の壺っていう話もあるしな」

悪魔の壺とは悪魔を一つの狭い空間に入れて自然淘汰の後に生き残った悪魔が最強の悪魔となったという神話。

最高のヴァーテを作り出して戦争でもしようって言うのだろうか。複合体でも数が増え過ぎると日の光を浴びても問題ないという仮説も確かに存在している。

「だとすれば網羅は神にでもなるうっていつのかしらね」

「人間の進化を追及している根底は創造への憧れ」

「または自己実現の達成」

府内は言葉を言い終わるより早く引き金を引いた。

死角から飛び込んできたヴァーテの右肩を弾け、その勢いはヴァーテの身体ごと吹き飛ばした。

「まだまだいるってことね」

「ああ」

「足音からすれば少なくとも三体はいるわね。あの吹っ飛んだのを含めて」

「足りるか？」

「充分」

角から飛び込んでくるヴァーテを狙い射撃を続ける二人。

銃弾の雨が降り注ぐ廊下に飛び出し続けるヴァーテを精確に撃ち抜き悲鳴を散らしていく。

銃口からは白い煙。熱がこもったハンドガンから伝わる確かな感触。

ずっと奥に倒れるヴァーテを撃つたのは自分だという事実。

異形の姿をしているが人間だと割りきれなければPTSDになり、自分が自分で無くなってしまっただろう。

「終わりね」

府内はハンドガンを下げてホルダーへ投げ入れる。

熱のこもったハンドガンがわき腹にあって妙な気分になる。探していたあの痛みよりも優しい熱の方がずっと心にしみわたる。

「何があつた？」

「ヴァーテが来たわ。そろそろ動かないとまずいかもね」

顔を出した織田へ府内がそう答えたのであつた。

「動くと言っても赤ん坊はどうすんだよッ」

「置いていくしかないわ。部屋の機械は稼働しているままだし、敵と出会って無事に赤ん坊を守れると思うわけ？」

「それは…無理だろうな」

「光陵のことを思っただけの言葉だろうけど現実はそんなに甘くないわよ」

「わかってるって…ただ助けたのに…」

言葉に詰まる大和は黙りこむ。

「これから何処へ行くんですか？」

「地下へ行つて車へ乗り込む。アツチの外へ出れば連絡を取る手段はいくらでもある」

「連絡が取れない？あなた達はレーベでは？」

「色々あるんだよ。俺達でもわからないことが起こっている」

不安げに織田を見上げるカスミに不器用ながら笑みを返して安心させようとしていた姿に佐久間は複雑だった。

カスミは本来は敵であり、捕まえなければならぬスパイであることを供述したばかり。

少しずつ意識が動かされているならば注意する必要があるなど自分に言い聞かしハンドガンに銃弾を補充した。

「ダージュリーガルからの連絡はまだないのか？」

「いや何もないな。反応はまだ消えていないことから動いてはいるってことだ」

「織田よりも上位の命令を出来る立場にいる人間からの命令を優先してあるか」

「もしもそうならば…考えたくもないな」

織田はそう言っただけで表情を強張らせ電子板を再確認する。

何度も話しては先送りにした議論だが本当にそれが事実だとすればどう対処すべきかを佐久間は考えておくべきだと心に釘を刺しておくことにする。

とつさの判断はリロードしていた弾丸と同じで覚悟しているかどうか重要なコンマ数秒の世界。

もしもそうならば嫌な言い方になるが帯解に陽子を連れていかれて正解だと言える。

陽子…どうしているんだろうか。

佐久間の脳裏に過る陽子は無理に笑っているように見える。はたして自分は陽子の為に何が出来たのだろうか。そしてこれからも何が出来るとののだろうか。

「…急いっ」

佐久間はそう言っただけで脳裏に浮かぶ陽子を消したのであった。

先頭に立つのは佐久間と織田。真ん中にカスミと光陵。最後尾に大和と府内を配置して縦長の移動列を作っただけ進むこととした。

慎重に進んでも吸血鬼細胞を持たない人間であるカスミには追いつくのもやっとの速さだった。

「病院はどれも同じに見えるな」

「慣れても変わりませんよ。病院は人がいて表情を作ると言われています」

「軽い病状の人ならば笑顔が溢れて重い症状ならば涙を流して遺体になれば無になる」

「嫌な言い方をしますね」
「…事実だ」

カスミに佐久間が返す言葉はどれも棘があり、それは適度に距離を置くための手段の一つだった。

本来ならば無駄話も辞めておきたいが息が詰まる状況で進むよりはリラックスして進む方が足取りは軽い。

疲労は判断を鈍らせる。適度の会話はそれを緩和させてくれる。

「この階にエントランスがある」

「ダージュはここから外へ向かったんだな」

「ああ。だがここから出るのは勇気がいる」

「危険すぎる」

「考え過ぎならいいが用心に越したことはない」

織田と佐久間の会話に耳を立てるカスミ。

情報を集めるのが癖になっているらしく聞き耳を立ててしまうと

二人の視線に気づいて釈明しながら地下へと続く階段へ急いだ。

地下は広い駐車場があった。

スロープを降りて周囲を確認するが人影はない。

「各自の車で同時に別方向に移動しよう。大和と光陵は俺の車にカスミは佐久間の車に乗って合流地点は追って連絡する」

織田はそう言って自分の車へ向かって走り始めたのであった。

「あの…」

府内と織田の車が出た方角と別の出口へと車を走らせ始めた佐久間にカスミはおそるおそる声をかける。

佐久間は外部カメラと通信機関連を確認しながら無言でカスミをちらりと見る。

「質問があるんですが…いいで…しょうか？」

「何だ？」

「私はなぜこの車なんでしょうか？」

「織田の車が良かったか？」

「違います。話をする時に府内さんだったのにどうして今は…この車に？」

佐久間がしばらくの間、無言のまましているとカスミは細かいことが気になって、と付け加えた。

ハンドル脇についてあるボタンを押すと中央に映されるモニターが立体地図になった。仲間の車の位置情報が点滅して別方向へ流れていくのがわかる。

「三半規管が常人程度ならば失神では済まないだろうな」

一つだけモニターが追いつかない速さで走っていく点があった。カスミはルームミラーを見て後方を振り返ったが紫外線を遮断する黒いガラスに阻まれて何も見えない。

不安げな表情になって視線を戻すとモニターには衛星からのカメ

ラが府内の真つ赤な車にズームし始めていた。

「このモニター……ってこんなもの映していたら危ないですよ。どうやって外を見るんですか？」

「そつちからは見えていないが運転席からは外が見えるように外部カメラとリンクさせてある」

「そ、そうですよね」

委縮するカスミはため息を吐いて頭を垂れた。

車が動いているのは振動でわかるが状況がわからない不安は言葉に出さなくても佐久間に伝わっているようだった。

「助手席用のカメラがある。吸血鬼用の車に乗るのははじめてか？」

「はい」

「だったらダッシュボードにあるインカムを耳につけてナビを起動させる」

エアバックの少し下にあるダッシュボードを開けて中から新品同様のインカムを見つけ、耳にひっつけた。

耳を覆うような流線型のデザイン。中央にボタンがあつてそれを押すとナビが始まった。

「もうすぐ外に出る」

ナビに従って外の景色をパノラマビューで見えるようにした直後にそう言われた。

外の景色はアツチを覆う薄黒い膜の内側につけられた人工的なライトで昼よりも明るい光が星のように散りばめられていた。

地下から登っていく道路は一直線に病院の玄関部分を見おろせることが出来る位置へ続いていた。

入口には整列した状態のダージュリーガルが見える。他にも複数
の人影が確認出来て、それらは玄関に向けて銃口を構えていた。

「アーリーの故障のおかげか、ジャミングが逆効果だったか」

「…どういうことですか？」

「本来はここへいる部隊じゃないってことさ。情報が正確では無か
ったせいでこんなにも簡単に逃れた…」

逃れた、と言った言葉で佐久間は顔色を変えたのをカスミは気に
なつた。

「いや違うな…見逃されたってのが正しいのか？」

佐久間自身迷っている様子でそうつぶやいた。

網羅製薬関連病院32

「レーベは網羅製薬の警備隊でしょう？連絡が取れないくらいで何をそんなに慎重になっているの？」

「ずっと見てきたからだ」

「…何を？」

「この瞳で現実を見てきた。網羅に切り捨てられたレーベを殺したこともある」

「ヴァーテになったから…それが仕事だからでしょう？」

「違う」

短く佐久間が答えた言葉にカスミは何て反応をすればいいのかわからないで定まらない視線を宙に泳がせた。

玄関で銃口を向けていた人間が構えを解いて立ち上がる姿があり、司令官クラスの人が来たことが窺える。

相手からは見えていないがカスミは無意識にシートの深くもたれかかり隠れようとした。

「その手段を俺達は知っている。今回の場合は狙われたわけではなく、巻き込まれたケースになる」

「巻き込まれた？」

「帯解の言っている言葉が正しいのであればヒューケと網羅新羅は交戦状態に入るだろう。その布石として今回の事件があるとすればの話だが」

「つまりは憶測の範疇を超えていないってことでしょうか？」

「仕事をしていれば嫌でも敏感になる」

「常に最悪の状況を考え、最善と思われる行動をする…今回の場合最悪なのがヒューケと網羅との戦争が始まる理由がアーリーの故障

でそれを仕掛けたのがヒューケだって公表すること？」

「吸血鬼対人間の構図が目に見える形でアツチに現れることが最悪なこと。最善なのは正確な情報を得るまで逃げのびること」

それに尽きると佐久間は言っアクセルを深く踏みつけた。

網羅製薬関連病院33

「お前だつて思うことがあるから大人しくついて来たんだろ？」

「吸血鬼を敵に回して逃げ切れるわけないですもん」

「逃げる？もう情報は無いと判断されたお前に何の価値がある？」

「嫌な言い方ですね」

カスミはナビに従って玄関辺りに集まっている司令官と思われる人間の顔にカメラをズームさせ表情を確認しながら佐久間に答える。音声が聞こえるシステムは無く、周辺を囲む人間やダージュリーガルに指示している姿だけがカメラに映っていた。老齢の男。蓄えた髭をさする癖があり、それは読唇術を防ぐための手段であることに気付いた。

「大事な部分は口を隠して話をしている」

「読唇術か」

「見直しましたか？優秀なんですよ」

軽口を叩くカスミを鼻で笑う佐久間にむすつとした表情を浮かべる。その余裕が憎いんだけどね、と小声で嫌味を付け加えてカメラをズームアウトさせた。

広域になるカメラは病院全体を見渡せる位置で止めた。

灰色のクリスマスツリーのように入り組んでいる道路の中央を真上へ向かって走る真っ黒な車が佐久間の車だと認識させて玄関や病院やその他のあらゆる施設からの距離をサイドバーに表示させる。

今走っている道路の回りを螺旋を描くようにねじ巻いた道路が左右から複数伸びてあり、それらを通行する車の認識も済ませ何処の組織の所有する車かを特定しカメラ内を動いてある車に所有団体名

をスタンプしていく作業をカスミは数分で終わらせた。

「これで視界は確保出来ました」

「情報部だと言つのも嘘じゃなかったらしいな」

「はい。それもこの若さで潜入を任せられる程度には優秀ですけどね」

優秀、という言葉に強くアクセントを置いて話すカスミが佐久間のふいに見せた感嘆の表情に悪戯な笑みを浮かべた。

やはりまだ子供だというのがはつきりとわかる。それは年齢だけでなく瞳に濁りがながいことがそう知らせてくれる。

誰かを失えば、何かを失えば、何かを疑えば、誰かを殺してしまえば、脳裏に過る現実をその瞳の奥へ押し込むようにゆっくりと瞬きをする佐久間。

現実が記憶をつかさどる海馬へ落ちるのをコマ送りに見終わるとまた表情は消えた。無表情の方が深紅の瞳には似合う。

「網羅と新羅の関係車両が多いですね」

「ここは網羅の病院だからな。新羅とも交流がある最西端の病院」

「一般車両は…見事なまでに0」

「登録をしていない網羅の私用車も一般車両になるのか？」

「はい？」

「なるのかつて聞いているんだ」

「そんな言い方…はいはい。なりますよ」

「だったら交通規制がある。この時間だと仕事帰りに通過する私用車が一台も無いのがあり得ない。もしかすると通信にジャミングをかけてあるのは院内じゃなくセクターごとなのか？」

「直接リンクするか周波数を合わせる原始的なやり方以外を遮断しているなら上からの映像もここへ転送出来ないはず。院内のジャミングも無いと思います」

「どうして？」

「NICUも衛星管理システムを使用しています。作動していたのに通信だけが出来ないのは通信をしているが拒否しているか、通信のように情報を衛星へあげる作業に何らかの障害があるか」

「そんなことがあるのか？同じ距離を同じ移動方法を使って移動しているのにアツチからは衛星へコンタクトをとれないのは考えにくい」

「衛星へのハッキングを防ぐためや単純なノイズカットのために特定の端末からの通信を完全に遮断する方法はあります」

「そうなる中へ俺らがいたのを知っていた、ということに」

佐久間が何かに気づき、伏せるッ！！と叫んだ途端、車体がバウンドするほどの衝撃があった。

網羅製薬関連病院34

「モニターには何か映っているのか？」

佐久間は暴れるハンドルを押さえながら冷静にモニターを確認させた。

グツと沈む車体に天井が平たく何か押しつぶされていくように迫ってきているのを不安げに見上げながらモニターを解析するカスミ。

肉眼で見れる外の景色はカメラに何か覆いかぶさっているせいで真っ暗だ。

「ッ」

「心配ない」

迫ってくる何かの気配が天井から左右の扉から背後からも聞こえてくる。複数なのか、単体なのか。生き物であることを伝える意思だけが車内の空気を震わせる。

蒼白な顔になるカスミに追い打ちをかけるように全面から衝撃が加わってくる。いつか映画で見た車体ごと握りつぶそうとする竜の手がふいに脳裏に通り頭を振るカスミ。

「大丈夫…大丈夫…」

「目を開ける！！瞼の裏に隠れても逃げられやしない」

「わかっている…わかっている…大丈夫だから」

自分に言い聞かすようにつぶやくカスミが大きく息を吸って呼吸を整える。

その間も車体の揺れは激しくハンドルを押さえても真っ直ぐは進めなくなっていた。左右へ揺らされている。

あの細く天へと伸びる道路を走り続けて五分。おそらくアツチから出るには足りずに外側を囲む池掘りの真上を通過している最中だと思つ。

「カメラから見えないのならば衛星からのカメラの角度を変えてみる」

自分自身の身体へ指示するカスミ。徐々に自分自身の身体と意識を近づけていき、冷静さを取り戻す。

「出た。何…これッ」

「屋上から飛び降りてきたかッ!!」

あの屋上で対峙したヴァーテが屋根に乗っかかり車体にしがみついている。

車の位置はまだ病院からそう離れていない距離で屋上から飛び降りたとしても充分に届く範囲だった。

五分…そんなに走っていないのか、と佐久間は自身のずれを修正しろと自分自身に強く命令する。

「このまま郊外へ行けば紫外線でヴァーテは焼くことが出来る」

「無理だ。それまで車体がもたないだろう」

「だったら左右に振って落とすしかないの?」

「それも難しいな。この道路は細すぎる。おまけに落ちれば…全員死ぬだろう」

「だったら…だったら…どうしたらいいのッ?!」

カスミはヒステリックに叫んだ。

それを吸収するために無言を貫く佐久間。カスミの浅くなった呼吸と外側からくる圧迫感が室内に焦りを募らせる。おまけに車体が歪む音まで迫ってきていた。

「ダツシユボードの中にハンドガンがある」

「ハンドガン?!」

「そう。自分の身は守れよ」

「ちよつと私は情報を」

ドスン、と世界が沈んだような衝撃があつた。

同時に前後左右の窓ガラスにヒビが入り、隙間から光が漏れた。

車内には生き物の臭いや息遣いやうめく声が流入してきてカスミは口元を押さえてダツシユボードを探った。

ハンドガンを手取る。ずっしりと重く、膝の上へ置いた。

「安全装置を外せ」

「知っています。授業で習いました」

「聞いているだけでいい。安全装置を外せ。そして両手でグリップを握り狙いよりも少し下を狙ってハンマーをおろせ」

「少し下？何を狙うの？」

「握力が足りない人は反動で上へ向く。しっかりと握れ。必ず離すなよ」

「…」

マジマジとハンドガンを見つめて言われた言葉を口内で復唱するカスミ。目を閉じてイメージを浮かべた。射撃訓練の成績は優秀とは言えなかった。

「撃ち方はわかったな。次は窓を割る。割られて車内に破片が散らばるよりは外へガラスを出せ」

ハンドガンを逆さに持ってグリップを窓へ叩きつけると窓ガラスが割れてすぐ近くにヴァーテの乳白色の指先が見えた。

佐久間は肘で側面のガラスを割ってから右ストレートでフロントガラスを割った。それを横目にカスミもフロントガラスをグリップで割った。

視界が明瞭になり、人工的なライトの雨が眩しい。

「ッ！！」

又ツと現れたのはヴァーテの太く短い尻尾。

ボンネットに叩きつける度に車体が丸ごと揺れた。さつきから断続的に続く衝撃の正体。

佐久間はアクセルを強く踏みつけた。

加速をしたGが身体にかかりシートへ押し付けられるカスミ。その手にはしっかりとハンドガンを握っていた。

「この先には堀がある。水の流れは緩やかでかなり深い」

「え…？何ツちよつと聞こえないッ」

「降りて戦えるほどの余裕はない。堀の中に落ちればジツとハンドガンを抱いてジツとしている」

「ッ何ツ？！全然…ちよつとッ」

「要するにまた落ちるってことだ」

そう言つて佐久間はアクセルをまたしっかりと踏んで加速させる中、生身の人間には耐えきれないGに意識を途切れさせられた。

薄れていく意識の中、カスミはただ佐久間の言った言葉を繰り返して唱えていた。

しっかりとハンドガンを握っている。しっかりと握る。握る…握る…に…

「行くぞ」

細く長い道路がアツチの天井に最も近い位置へ来た時、車体がふわりと浮いた。

その時にゆっくりと意識が飛んだカスミは視界に近づいてくる全身に降り注ぐ光に飲み込まれていくのを感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3374w/>

沈黙のサーバント

2011年10月12日11時56分発行